特別
イ 4
3163
1(7)

拾遺和謌抄序

和君りなるのしきしまのみちわたりのうち
たよるのうゝ流の鐸をもしてやまとのいほ
光のうちもの花鳥の事をのす花をうた
日本のもみなみ流のことわさをつたふ
ものゝまゝに毎の春月は娘あまに流るり
まはゆくてたゝのもとをしるうた
おつくまゝ次是をやわたらくもろこしの
古人は月をならへる風にならむちるらし
たゝもいてもえもならひなるをもなむ

とふことはりつゝなへたゝなくなかのあ
まわにしきしるしはかやまとうたなりともに
松たまひてなれは拾遺集といへるなるへし
かれの花ことにうへつゝいもちいさまり紀
なりをへきよしなかくなりてすきしに信越
うたゆくりにことさま鶴はのくことなれは
もとうらまたまつりにそ夕つ遠ことの人なく
カまゝより時にしつ信をくなりしこめく
おもひもつゝとゝもくゝ事ことはせのかき
乃まり秋ことろはれてなまいかる屋也乃

いにしへの宮花夏冬雪月のけしきのみなる
宮のうちおほいろもあらはし花流るゝそまりける
りかきへ侍流るのいともしたゆかうなるし
大和うたの源をおしてたの森よりおもふ
たなはたにさらましく水の流ゝけ葉をかゝ
きゝつゝうちにいるのこゝろわかるゝ
事ハ古今後撰拾遺集よりそのさきい
とりもなほくの外のこゝ秋のを
しのゝをふかくなのはしの色見
さゆゆかしきねのまてともさへわにうる

いにしへにこゝろありてのこゝのはゝのことはりともしら
これあらはしたきもあらむ天暦のみよに
よわくふかよりてあまりをはしとりめ
まわれとつきとしともとしと粉あらま
まのかしもらまするこれふりする侍の
ありつゝそさをあら流としとし道て
この流の吉秋のいしのやまとうたの
これゆまわりそ流あまりわいともなる
延喜のにもとくこのかしにことさ
とそれしもとにはまの松もともあらは

山の井のあさきことにもまつかふかなし
まかる梅の月はにほひかはらぬ言葉あり
の色のすゑもひろかるとは千部かさね
ちりとなるわやつもりなむひてたる
紀ともつまさつねる後撰拾遺和歌抄
とふあけよめちて後撰かきりの集
詞いてあまたともなる古今の集をは
またあるは人しかくてさて後はての
あやしとくるかを甚かもさしうちあれいゝ
猶又のちかへ思ふ昔老とすくしちの

伊勢老人といひしもの給けるたくひなき
ものなあまいつ数ある大中臣能宣清原
元輔源順紀時文坂上望城はえらぶ
またえらひしこの心もとえらひ給ひし
のちくさをすゑ水のいひあるとしたかふ
代なかのこゑしてつ時人老新もえとをて
とのせはことしこの世ともしかうかい
たるにまかてそめにつきゝさなすみふとに
またせうなる人事にとにかくうとしを
あ月ちとやらとしまうすことゝもてそかはを

ちかき世の事にやとおもふまゝにかく
あまなるへきことゝはなしとはかのよにた
めにより聖武よりこのかたの世々の人の
あつめしうたはいひあつめたる集もある
らんかしこの御時かすをたにしらぬなれと
まつ奈良の御時に万葉集二十巻
をえらはせてのちこのかたのものと
絵へ給ひし古今集のへりやまとうたかく
しるかは紀貫之をあつめさせたまへ
はかりとのせにかなはぬてまつるへし

の御時の延喜の御門は万葉集
のほかの詞二十巻をえらはせたまふ
事は又紀の貫之とのちの古今和歌
集是なり村上の御代に梨壺の五人
古今和歌集よりのちの歌二十巻を撰
ませて後撰集となつく文武天皇
をとこ紀の時文なと後撰集にいれさせて
かきあつめて拾遺集ともなつけ絵へ
かの後の集は言葉のつまのことく
よしてやうやくしもかしこき人の外大納言

なほこゝろ大地あまねくわたはなのことく金ぬ
むかしよりてくゆりたへたなるこゝろもちあ
まわいるもらをつきいくし文ともあまわ
いつくいのふると金て世まつる人たま
さつのミさすゝめやまとゆくのりうつるこ
ちゝ手にいふ事ちとえしひて揚すへ
カ小ようえて人のんもと杉つとうしも
まう九きふのやまと詩を撰て人か
ともしも句いくつらへるふ一首ともあ
はめそにのきはまとにうし集とい人ま

いまもいひつゝへもとくかゝるちのにほとく
たるふるを書出てゆるなたまの大集と
かあくなつくたる大の言葉にのりあそふ
かくさくのふるをけるあみのふよるこへ
むくとくの集いうしきもやしきも
さみるもしるにもたまくしうゑめく
きれいるをやふちゝたまと恋をとふ
ことをす文らくハ祇園は姉と子も
乃世りいも乃らに衣あとをも絲のといを
言葉人へよきつもてまくも世よあい

としへてふる人のいのちもたえていきて玄ゝ
集とさためたまひしまての集は大
たまふ事ハ兼盛のたくふハかきまろ
おほしとをもとぬきいてたきにあらむと
きはけ集よりのちまゐることもなし文のはし
き萬乃集といふはいまたきのこのみ
志かりとふかくしてきのもと萬葉
といふはあひかたくも葉はやとおもふた
ころ揚名まこのもにしたく見えたまへ
志かれとしきてくはし文字のいふとよろしも

たしかなるはたとへは山川のなかれもとめて
見るなのを根のしく霧のうちのたえまて
もとのうるさくさいつまのかへきとしらむ
かくとしまつほかいのこのしま集よのちさ
寄頼ハかなの文字のまもとらしなからふ
つかもとのおもとこそしてのなかのふも
玄乃まつりるか名はいとも名のあは
なさはころハとろくのせつまこのうち
まへつうのつかるふことも葉もたへ
くのたくなむきのそくてみかの関

のちとつまさつくところくのもろはか
なつはは暮やつもとまつると
なつきいつつくきもおもはすこのはつ花
霧たちくはめくうのゑ梅松ふよ
をかきりてさつふきのうちまきくと
しはのうきかまあけめたるいろにの
名の高くあはれとなもはまのき
まもそなはことつしいはまちえてへ
ふんいろ雅しつよなるゐかへつく
きあれとふいくちきぬもの名れは

いろいろもいまもふとうくなまおきよ
なせ段は松くちへ水も清うなんこ
ともともちいてえつへまなつしさ
つなれいなへなるとも葉も風ゆ
あまちまいそ色のよなはきのこと
樂もなとともりふとさふゆきこと
まつわてもまゆのゆき紀姫のよ波
くれのつくとしふのおもひを
なきつてなへと陽よなわめしいかなす
きりのりのとしの名紀秋花いもとい

のしなわゐるしらしあまめうるとし
ちゝはしうつまゝあれとふりき

拾遺和歌抄巻第一

春上

正月一日よみ侍りける　小大君

いかにねておくるあしたにいふことそ
きのふをこそとけふをことしと

冷泉院の宮に侍りける時春たつ日
侍るよみ侍りける　光朝法師母

[illegible]
[illegible]

[illegible]
よみ侍りける

源師賢朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
侍りける

橘倭経朝臣

[illegible]
[illegible]

寛和二年華山院乃歌合によみ

はべりける　大中臣能宣朝臣

[illegible]

平兼盛

[illegible]

題しらず　加賀左衛門

[illegible]

天暦三年太政大臣の七十賀し
はべりける[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

一條院の御時殿上人春の哥とて
こひ侍りければ
紫式部
みよし野は春のけしきにかすめとも
むすほゝれたる雪の下草
花山院の哥合に霞をよみ侍る
藤原長能
谷川の氷もいまたきえあへぬに
みねのかすみはたなひきにけり
題しらす
藤原隆経朝臣
春きては野邊の霞にまかへつゝ
おなし花やなほにほふらむ
和泉式部
春はたゝわかやとにのみ梅さかは
かれにし人も見にときなまし
鷹司殿の七十の賀の月次の屏風
に臨時客のところをよめる
赤染衛門
むらさきも緋の袖もみとりもうれしきは
春のはしめにきたるなりけり

是明門宮ものとよみ侍ける

小弁

むかしみし大宮人はいまそきて
うつりまちあらしそめしきの哉

入道前太政大臣大饗し侍けるよ
屏風に臨時客のかたかきたる所
もとよみ侍　前兵衛督能尹卿
歳もしあらしへとまちもけしきに
まちかつらめにきしたちわかつ
おなし屏風に大饗のかたかきたれ
たるにとまりをも待つにて侍る

入道前太政大臣

君がよのまつにかはれる雪まをしく
乃辺のこまひにもやしつらん
成るつて春宮立てまつりける時
三井寺にまつり侍けるはな
やむ

よみ人しらず

まだちてなかるる白雲もとくひすの
をちつまぬともやいつちはあしかるまく
常もとくへく行つる

大中臣能宣朝臣
山たかみ雪ふるはわかくともけふ乃
いつしかくかはゝふくかみすは
正月二日あふさかにて鶯乃聲
をきゝてやすみよしよ人につけゝる
源兼澄
ふるさとへゆく人あらはことつてむけふ
うくひすのはつねきゝつと
選子内親王いつきときこえける時正
月三日上達部あまたまいりて梅
枝をいふをとりてたひのはなにさしける
よめりわかいしらうにもとゝくたへ侍
りける
よみ人しらす
ゆきつもる雪ふりしつゝやまふかき
春きてもしらるゝ鶯乃声
加階申侍けるにたまはらさりけれは鶯乃
なきをきゝてよみ侍ける
清原元輔
鶯はおもはぬなかにひとしくてかはる
いろもあらぬ人乃やとをとへは

後涼殿のまへの花を見て少人
とくちぬもとゝいふんをよそかに

藤原範永朝臣
ふるさとやとはれぬみよりかけふる
たかのかしらにいれし一辞よりける

小野宮太政大臣の家の子日し
はるかるよよりみ侍りわかるゝ

清原元輔
ちとせ經る子日の松を
ほのかにたのめしるといふをともにまん

和泉式部歌こしに
ひとつまをことねは子日の雲による
いろちとせもとよりの人はきもとる
西宮右府小松をまつ
ときはすり行かるゝもちゝゑあり

よしなし
きみか聲りいそめ子日のまつの
かはらぬわかもとやふるき有る
西宮一の子日ゆふまて侍るよし
道信朝臣妹乃もとに子日すまゐせさせ

いはふとていかなる人もしけるよゝに
あせしきみかちよのさかへをつけつ
るかな

賀茂成助

君かよはしらくもかゝるつくはねの
みねのつゝきのうみとなるまて

後一條院におはしまして上東門院殿上人
のおほむこともかくふとかくれ侍るまうて
日はよみ侍りける

大納言小式部

袖のうへかけけるやしらぬ小松原

いつまてとしらぬちよをかそへける

三條院御時上達部殿上人ふ
とまりせんとし侍りけるに東宮女
房ゝ母思ふ様に物かたりしける斎院
ときはなるまつのみとりもかはらぬと
よろつよまつ侍りける

堀川右大臣

ときはなる子日のまつをひきつれて
しめなはかけしあらたまのとし

民部卿経信

紀久と里野辺乃たふれしに
ふかしこきまつをとめせけるかな
承暦二年内裏の歌合によみ
侍りける　　　右近中将公実
君か代にひきくらふれは子日する
松のちとせもかすならぬかな
正月七日子日にあたりて侍りける
かくてうたよみ侍ける
伊勢大輔
人はみな野辺の小松をひきにゆく
けさのわかなはゆきやつむらん
正月七日子日にあたりて侍りけるに
けふはわかなつみにやるとて道通宗朝臣
侍乃もとわいはれはいひおこせて侍れ
はよみ侍ける
わかつくる日まきすゝかたなまてつゝよ
君のとしひのわかなわかるま
たいしらす　　大中臣能宣朝臣
白雪のまたふる乃春日野に
いさうちはらひわかなつみてん

和泉式部

春の野ハ根さへかれにしものを
おもひつるものハよそにまかりて
後冷泉院の御時皇后宮歌合によ
侍りけるに　　中原頼成妻

はるのよくにみな人ハいたましとも
なかきよのへのわかなはつきせとも
正月七日周防内侍のもとにつかはしける
参三位

みきりはのちはるにはしもとふへきの

雑はふるの野のわかなともつみ
もろともにあをはるのわかなつみも
けるる　　大江正言

いたつらに野のいかにてとしをは
たしかにみるのみわかれ

能因法師

よそにても我はなかしなかめ
わかのいつれかつまむらむ

選子内親王

春いまたつもれるゆきもまたきえす
山里に

たちよりてとふ人のなきやとの風
春雨はとふに一夜ありなし
もとめてこそあふみ付けりけれ
前中納言信
ちらくとやとのしるしにもて納言
たなかしもの家ならんかしき
草いしに　曽祢好忠
ゆふまくれつくりつのくさかかるらむ
一夜のほとにかすみをそまつ
正月はかわにけふの色をまつ人の

もとはいかにつゝしみつゝ
能因法師
心あらむ人にみせはや津の国の
なにはわたりの春のけしきを
影とこい　人まて
難波かたうら吹風にしほ
浪のくもあみつのやへのこえをかき
春駒をよみ侍
僧正静円
あしはらのとまとくさののくめは

冬立ちける日よみ侍けるいとあはれなり
長久二年弘徽殿女御の家の歌合し侍
けるによめる
源兼長朝臣
たちかはる秋とはいへと道はあれとみえぬ
とゝめもみちもやとりにまかせたる人
屏風の絵に人の家にみちある所を
人の眺望したる所をよめる
藤原長能
かつ見つゝ八月まつ人の家に思ひの
あまたの春をおくりきてこそ
野焼を見て 和泉式部
秋まての命もしらす春の野に
萩のふるねをやくとやくかな
後冷泉院御時后宮の歌合に
残雪をよめる
藤原範永朝臣
ちるかたちまほにはいかはにはこの
ふしの雪のかみはふゆしつる雪
屏風絵に小松ひきたる所にかける男

まゐる所にてよめる

平兼盛

梅の香をたよりの風や吹つらん
春めつらしく君かきませる
なかれとはのこのそへにかゝるに

大中臣能宣朝臣

むかしの梅をもてまゐるまの根にそへて
なやとをくにあやゆめかゝへ
春秋夜のやみはあやなしとふ
かくれかもとよみけるに

右大将道綱母

いつもの花やこのいかはて家へ
梅よりはいつかをしみかねわ
新しまと　大江おかたえ
梅の香をとうふのいのちかきまつかせ
まつ花のいふ花のをくほかけるに
井上清時法師紅梅と女院
ともてゝゆきせ絵かゝしかゝへ
よみ侍

清原元輔

梅か香は香をいとくはまやめと

うちなひきえいはへにせまちのあき
山里はまたきにけるよ大梅もとよ
かな　　　　　　　よみ人しらず
香をとめの須をの心にむすひ君のねをあ
さとめのもゆにともぬにもとも秋
猶さてとせて
右大将忠経
わかやとの荖梅ゆとふれにしにろ
おとろへいつまてはかくへき
春はたゝわか宿とのみ梅さかは
和泉式部

かれにし人も見にときなまし
山家梅花といふ事をよみ侍ける
賀茂成助
すまぬめしは梅のさくよの月かけは山里に
しらぬ人春にしのきなとよむ
春の風人よるの夢とにふかきものそ
前東宮影隠下
むめの花色香はわけてもえしらぬ
やとには風のまよふつまてし
梅花を折て人につかはしける

素意法師
梅の香もとかしはにほふらん
おもひもつゝぬるまて香そする
太皇后宮東三条にて侍りけるに
まゐりけるに家の前の梅をとくへ
まだはいと色の盛になさけいはんや
いとおもしろく咲たるを枝にむすひて
流そ何事やあれ
弁乳母
かはかりもにほはさりける梅のはな
さかりの宿のゝゝ思ひつるかな
たいしらす　大江嘉言
わか宿にうへぬはかりそ梅のはな
あるしなりとも香はかくれなし
清基法師
風吹はをちのかきねの梅の花
かはわかやとのものにそ有ける
道雅三位の八条の家の障子に
人の家に梅木ある所に水ありて
客人まうてきたるかたをかける所

藤原經衡

たつねくる人にもみせむ梅のはな
ちるとも水になかれさらなむ
その色梅毎とふへもと

平經章朝臣

まさ志むかし人のそてやふれけむ
梅のさくらぬくしけのそのあはれ
長吾るよりは[illegible]之月にあはる
人のゆきよりいつ[illegible]

上東門院中将

思ひやる宮こはめかりやまさと小
つ白きつ經のまちあき秋く
都さへとも

小弁

ほふそて梅とかへつるか小山田を
まつちかへみまちまつわ
陽虎もとちらの間

赤染衛門

ゆるの里千云并りるのかぬむあわ
ゆふ二世秋もとなくとおもふ

藤原道信朝臣

梅つほに藤ありしとしのやよひ三日人々まゐりて
いにしへのまつをとひけるをみたまひて

馬内侍

ときはなるまつもひさしくみえつるを
毎のとしへつきせぬ人のこゝろをは

津守国基

うす墨にかくたまつさとみゆるかな
かすめるそらにかへるかりかね

弁乳母

ときしもあれはるのなかはにあやまたぬ
よはのけふりはうたかひもなし

康和二年二月山田河原にて梅のはな
とよめるをききてよめる

大中臣能宣朝臣

一とせにふたゝひさかぬはなゝれは
ふかきいろにもにほふなるらん

天徳四年内裏歌合に柳をよみ侍ける

坂上望城

あをやきのいとよりはへておるはたを
いつれのやまのうくひすかきる

柳池水といふ心をよめる　菅原輔衡

池水のみくさもとらて青柳のはらふしつえにまかせてそみる

題しらす　藤原元真

あさみとりみたれてなひく青柳のいろにそはるの風もみえける

三月はかりに小弓羅遣はしけるに

あるしやとたつねてきつる人もなし

華ゝ小ちるをとゝめかたとそ

はいりこむ梅ちると思ひしをと
てつかはしける

菅原孝善

春雨のふる山の端も思ひしらす
思ひしらぬ花をみしかはまたも
人ゝ華見よ海のまけつれなくとも
つゝはしとまちかねてつのりけり

菅原淳経朝臣

山櫻のみ小枝くみちもとほしつ嵐を
人のみそ夜はなかりけれ

あをしきのかなハ梅のかへにも後徳
都ト乃伏見乃里よ人もまちける
はてしたまとも去りしそもとせし
せ佐るわらまれ

皇后宮美作

うしやまし梅もとも乃かおりて梅
ぬしみの里は梅のかまといふよ
ちかよにのよりハ佗清野
やまかるもをのそに濃ゆ佐くまくら

賀茂成助

小萩さく秋まてあらハ思ひいてよ
さかのをやきし春ハその日と

永源法師

桜咲とをのハなりまさんとおもはねは
かおりてもの峯みえねいとつらきかな

中原致時

梅の香をとめてこそくれ梅まにほひを
やとすきのねやりもせてしかる

橘元任

めかまの〳〵けるもとかへやまの桜

こまりわたにふ人へりまかり
一條院殿上の人〻舞ミける夜
かまへ女乃中よりいひおこせける
源雅通朝臣
おくいおかれていのこ山そとくら
くふもとくもとかりつ見えおきて
花し
風かね
ひらぞたらのまたりる桜ふ桜
明けもちつる小折ゐきいまのを
侍従宰相清晴上一乃おのことも
いもつんふ海のかきてこうなとと岩せ
二条余乃一宮乃清ろ以中そまま
いまそ待らるふ
一文殿の
周ろや楽乃かりのいかくちいれ
しらめなる人〻まくくやもちる
今上清晴殿上乃人〻もりんゐま
ろまもろろかつるむ宮乃待りわ
とき人ふかかいまるめはたかいる
右大臣北方

あくまてかくれぬへきやまの桜
ちらぬる人はなくてやみふ
障子乃絵に花多く咲る山里
に女あまた有ところみ侍る

源兼澄

とゝこせと咲まし人のあらはこそ
花乃ちるまもとくとこそみん

たいしらす　祭主輔親

伊勢の海もとより山のわたりそちるまも山桜
うつろふ色をなけくはかりそ

藤原為善

桜花ともにちりぬるしつこゝろ
花のあたりのぬしなきは
ちるをとなかめてもちりはてにけり

小弁

山桜心のまゝにまちえては
かへりてうらみむちらぬまに
長楽寺にまかりける時わたる
里乃桜はいかにとおもひやる
よみはへりける

上東門院中将

まちかねし花のちりのまかくれ
おなしくもみなきし桜かな
白河院にてをかしくもなかりける人に
或人も申侍

ちりのまに人をとやつれにも侍
おちこちもみやこはなれて
南殿のところを見て
二条関白
かへりきて小ぐらの山の花のちるとも

かりそめに雲の上まてにほふらん
上はおなしくも詞のみかへりけり春
のかた毎まかりてふるさとのみ侍
河
大宰大弐資通
さくらも見えけりかへるとも桜も
あそこもとりのはなを見て
またもとおもはぬ花の
大中臣能宣朝臣
桜かりなこりをおしみおもひ
まちとおもひかへしはなにおもふ

河原院にてのこりの山桜をよみ侍る

平兼盛

見る人もなくてハちりぬる桜花
こゝろもとなき風まつほとの
東田桜といふ人もなきをよめる

能因法師

桜咲春はよるたになかりせは
夢にも物ハ思ハさらまし
ともかくもさくらをたつぬるも
住(?)ならハよめる

よみ人しらす

うちはらし人もすさめぬ宿の桜哉
よそにのみ見つゝ過にし
遠近のよるへもなきに道のへの
山桜をも見るやなかる

和泉式部

ここに人いつとも見えぬ
から桜こゝろあらは
都をしりてきて
人もとはぬ宿にもさくらかな

たもとやつまともと[illegible]の涙
千[illegible]とくいつ[illegible]
よ[illegible]
道家[illegible]
[illegible]人[illegible]
まちいつるや[illegible]
紫式部
[illegible]
花[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
花[illegible]
[illegible]
[illegible]九條の[illegible]山
[illegible]
[illegible]
我宿の[illegible]
[illegible]
[illegible]元真
思ひ[illegible]

いはひそめけむかゝるまことをしらは

承暦二年内裏歌合によみ侍る

右大弁通俊

君かよはちよにひとたひゐるちりの
しらくもかゝるやまとなるまて

屏風に鷹狩人の鶯のこゑをきゝてたちとまりたる所をよめる

平兼盛

わかやとの
華みにくると人やみゆらむ
まつとはなしに妹やしるらん

屏風の絵に三月花宴する所

はるのゝゆきとけたる前をよみける

元輔

まかふとてしめぬよもあらし
いとゝくも心にものを思ふかな

後冷泉院御時殿上のをのこともけふ
花のこともよそにいひて雲林
院にまかりてはなをみてよみ
ける

源道済

うくひすのなきつる宿は人のこゝろにて
きのふもけふもやいかにとみる花

通宗朝臣能登守になりて侍りける時

出まそ人ミ子合に花をよみ侍る
寂蓮法師
山桜しら雲りゆかぬみねもなし
春めくる深山のほなちれらん
守覚法親王摂政太政大臣ひよきとはて
ほのかなる
伊よりへのもなし人はそのほか
花は春のもしらまされわ
民部卿重信
流れもあとしかはいあまくまさ
ふるいはなれとも三月のわか白河

りまのわけつもやすて山桜の中わ
かくしあまるけしいはそやそ侍
ひみはいとあはれ
中務卿宗尊
桜每とろわこそはいはなとの
むかしのなこりとまわれ
遠花雅也水そとうかは哉
按下一乞成
よそふのほかにとまりてのよは
浪のまのかけ每とかよへるらん

としことに梅はさくらとはいへは
かはらとよめる

源縁法師

夫はことなれとも山桜
としのや梅の咲まさるらん
二条殿の花の宴より此集
雨はれぬ花のよるのわかまき
むかしは宇治殿太政大臣なかれを
は殿よりあらはれとも心
いせそ任ぬ人の男舎人清

くさきはこなたより清けれ
ぬるくかは花をかけてとよ流
かつちるまゆらん

能因法師

在五中将を思ひもそへてしもわたるにも
こゝろよろしといひしたれとも人々
花をかの太政大臣いとおはしわ
ところいへる心を揚なとしけれ
かはらとも舞はゆのつくしかな
又伊は雨のわれきえつもる心はい

まくら春乃ひかりに夜橋乃中を思
はなさく藤河下ゆゝしく流
かけきつる
左近さとも雲はれしや桜花
こゝろにたしかにうつりまほし
二条院乃一宮乃女房筑前白
川よきうすはつかよひしれる
伊賀かれ
ちる春に花はちるに思はす
ふかしう河のゆふべともきをい

思ひかねいまゝら春乃夜もえ人
くもけたるへてあひけるは
いつの山桜もとの小花をとゝふせを
よしかは
大江匡房卿下
こゝろぬめもにもとくら咲すゝわ
とやまの花のふもとのうへん
まさし櫻とも[illegible]
左京大夫顕輔
よし野山さくら花[illegible]雲り
かそのくかへ桜るゝ[illegible]

関路よりまかへしなかりて
春乃ゝちとや思ふ人くもみゆ
るらん
藤原通宗朝臣

思ひやることにこゝろのいそく庭桜
ちるまての後はふかくちとせはみ
花下にかへらんことをわするゝは
かすみもとにゆかなる
良暹法師

とふ人も宿にはあらし山さくら
ちらぬまてこそかへりみはまつらし
春毛由柳とめもひとつ心なる
よぬるうきをかゝる小法師はた
きえともさらにそえともゆかし
加賀左衛門

ちるまては旅ねをせなん木のもとに
かへらは花の名たてなるへし
東路のなこその関のはる風よ旅人心
のとかにとこそよめ
源道済

ちりまかふ花やなみちをかくすらむ
ゆきまよふへきやまもとのかけ
おなし清涼殿の御前に桜の
花あまたさかりなるに人
くの花をよみ侍
春のよのなかに桜を
ほのゝゝと花もみしとやおもふ
大納言公任
いにしへのはなの色そ
くらし

花もみし人もまたしの
中務卿具平親王
家にて
ふゆつくしの人もまたしの

後拾遺和歌抄第二

春下

三月三日桃花を御覧して

花山院御製

三ちよへてなるてふ桃のことしより
はなさく春にあひそめにけり

天暦御時御屏風に桃の花ある所
まかりあそひける所

清原元輔

咲そめしいく代まてぞのとかなるもゝの
いふものゝはしめのはるのこゝろを

在五まゐるのもとにおもひをよみ侍

出羽弁

おほつかなくもなのもおもはぬ
めつらしきはなのにほひのよをへても

永承五年六月祐子内親王家
歌合に侍りけるにこの中に桃を
とくよみ侍りける

堀河右大臣

桜華あかぬあまりにおもふかな

ちらしはてゝ人やはおしまとらまし

題しらす　円融院

おしめともちりもとまらぬ花ゆへに
春は山辺をともまこのとしつもる

天徳四年内裏歌合に

平兼盛

よとゝもにまちしもおもふ桜をも
あかぬなかはいつのたえへき

大中臣能宣朝臣

桜花まつはちる花にちるまちかわか
まちもとは人のおもひきぬるなり

屏風の絵に桜花の散る処

このはなを不もとよとはるかな

源兼澄

山里はちるをまちてもめかし花ちらぬ人そ
たれをかはちるてへし人まつらむ

大中臣のやうてけるまきにて
伊勢のこゝろよりてけるに源
のちまつりてのみやの宮人もあすの桜
いとおもしろくちらましはなち

とゝまらてよそに行人かな

右大弁通俊

さかねしくの神なひは桜花
をしまぬつゆやしみいちるまし
山のはの花をもちとよ行人に

橘則光

桜はもかくちりかゝるをぬきとめて
いのちはあきしのかみまて
清華とよるあらむ

坂上元成

たくひちるともわかいとふさへ
もたかれやとふみのこゝろ
華乃庭にちるほとに行かなほさ
ふかる

花のうへにとまるこそ
清原元輔
みし花をとゝまらぬ庭にとひみてこ

承暦二年内裏歌合

よ桜をよみ侍りける

藤原通宗朝臣

打花よいちりけむかはむて桜花

あをかしはなにとさいはなれまね
言いひしまて
心のうちをはかりおもへや
ふるさとはまてとはいふともやまふくや
三月のつこもりにもものちるをみてよ
み侍ける
土御門内大臣殿
うらやましいかなる春もちらされれ
物ならはおもひしもせすはなまて
承保三年三月五日殿上の
[illegible]詩歌侍けるによめる

大弐三位
吹風そおもへはつらきさくら花
こゝろとちれるはるしなけれは
題しらす　中務卿具平親王
年をへて華にこゝろをつくすかな
おしむしもしとはちるはなれと
あかつ乃櫻乃ちるまゝに水まさるらむ
ちとせのみるそあかぬ
大江嘉言
春ことにめつらしく見えしはなれともしか

水のうへにまかせてぞやる
白河のせきもる月に水まよふ
うつろふかげをよそに行らん

土御門内大臣

松かげもおもかげをみしともしめやまどふ白河の
関ともしらでゆかれもひかる

粟田太政大臣の家にて人々もちかけ
しこ侍りけるによめる

藤原為時

をしめどもとまらぬ春は毎ハ咲まされ
もろともにちるとも思ひけるかな

庵にこもりてあきのちるまことに
侍りけるにいひつかはしける

和泉式部

風のまに吹くるはなのちるをみて
ちるともすぐさじほかへゆかまし

三月つごもり暁若をよみ侍

藤原義孝

くれの
暁の秋ハやよひの月のいつちとも
まつらめのかにとどまるかな

ほとしもとこそおもへ

和泉式部

いつとしもわかねともあきはせこのとき

くれゐまつめづらしくあはれ

藤原兼孝

わすれしこのきみかめくみいつもとみえて

さつきとかめるいはけしからす

内備と云ふ所にまうでて文備逢

業なれとも小庭の花もとめてあ

さいはひよとはしも

大中臣能宣朝臣

藤の花とはみれといさ庭の桑の

おもひもけぬ露のたまらは

能之らは

江大女房

あさり別ほとゝめぐる名残のなごり

いつかともひとこえはつそかをさく

源為善朝臣

あすかの花おもはてゝかとをへこしかは祀

もかもゆいのくるやとうつるへ

承暦二年内裏歌合の人にふちを

よみ侍る　　　　　　　　　大納言實季

君か代に小松もちよのかけそへて
岩ねの松のしけりあふまて

正三位泰憲近江守に侍りける時三
井寺にて人々[illegible]いまはしめて歌
よみ侍りけるに

よみ人しらす

もとめゐの松か枝をひきうへて
くもゐにのほるかけのうちに
君か代を

若菜摘

なとも三のそへも松のかけ見ゆ
たかやはとなれるきみか代の
大貳三位

ねのひせしのへのこまつにかけそへて
岩ねにおひしまつはちとせを

長久二年弘徽殿女御歌合に
蛙をよめる

良暹法師

みかくれてすたく蛙のもろこゑに
さはきそわたる井手のうき草

題しらす　　前参議雅経(?)

鶯はいとくつき(?)野邊の雪まも
のこるまをしくなきやはなきぬる(?)

清瀧に近奈(?)は帰の行ゝふとぬけ(?)
はまかわたる夜にこそわかの行んも(?)
せいはなも(?)　　雅円(?)はし(?)
高光(?)とすまて(?)しのかたはる(?)
ふかれまもよとる(?)せとさふとまし(?)
三月川にも(?)はまに熟(?)落ぬ(?)
ふかゝえ(?)行る　　中納言定家(?)

ほとゝきまの思ひしつゝあらぬはまさき(?)
ことしえゆくてるしゝさかはゝ(?)
三月晦日惜春といふことを　太宰権帥(?)
まのまはは(?)
はるをまつはしたのしもへ年かのこゝろ(?)
花のこゝろをまもしくつくゆき(?)
三月尽日春やのはきまのかたまる(?)
永徽(?)法師
思ひしもはることのこしふ紀野邊なは(?)
まちつゝまくへいかのきめつつのは(?)

後拾遺和歌抄第三

夏

卯月朔日よめる　和泉式部

桜色にそめし衣をぬきかへて
山ほとゝきすけふよりそまつ

四月一日歌よませ侍けるに　右京の衛部下

咲りまたゝち人も花ちりなんすゝしき
ふかまつらくほとゝきすの声

摂津国乃こやといふ所にてよめる　能因法師

我宿の梢の夏に成ときは
生駒の山も見えすなりゆく

源重之

夏草はむすふはかりに成にけり
野かひし駒やあくかれぬらん

題しらす　曾祢好忠

七くの聲きく夜の月はさえたれは神山のあたり
あさの葉のしけき木の葉もまた
山家水鶏をとよみて侍る
大中臣備弘
山里はしくゐな葦のいとなけれはいふかさまさり
とさはまやならすもとたゝくの鶉の聲
山里乃秋月毎夜をよみて侍る
為家通宗卿下
詠めつゝたゝかひ今もなほ山里の
有明の月の夜ことにすみなれてきこゆ

民部卿泰憲近江守にて侍ける時
三井寺にて歌合し侍けるによめる
よみ人しらす
しら浪の立ちもそたかいとかへつゝ
みをもとゝむるうきの者なは侍
歌とて侍
月影をよめるとてよめる乃每夜を
あつまの有明乃月もとゝめ
宇治の古の今よりもなを清く侍る
大中臣能宣朝臣

あいき乃たくひあまたまゝはみえるかな

ゆきふるにて乃うちにとうかたに

西宮前左大臣家乃絵合し侍りけるに

かへるの遊よみ侍りける

もとの人

恋乃をはなちの しるしかくそかわ

ありもとゝろへたまへは乃もと

伊勢大輔

うつ乃毎乃跡はとられはさつし侍の

たちかへ乃川乃あさきしとみゆる

ありもをとゆへ侍りけれは

源道済

宮こ乃こあやまりそわすのいもよ

かへ遊にもりまとゝ花る山里

親王家歌合

しけるゝよゝあ侍

元慶法師

あかつきの 梅の はるかへ

いつもの とゝもにおそのしる華

影さへてし 花をはらまし

郭公なかはまてこそかたらはめ
おもふことたのみし身にはあやなし
四月花毎日に右近の馬場にて
けるきこえしとふきかはる
あけ夜なかのきこえけるまに
ものは
堀河右大臣
けるたつぬるわかな
るしけりやいかにいま
三条太后宮
前大納言忠

夜なかにきこゆるをきゝて
あけ郭公のなきけれは
題しらす　よみ人しらす
よしの山こゝにきくこそ
ありそむる年も
禖子内親王家歌合に
かつ時めかしてあける
三条院の御時右近の人の
もとにまかりて
さくらのこゝろもなく

皇后宮美作

あさやふるの神にはまとはれ
みつかきのおほみ鏡のと
まつりの使しそめにけるかな
ほに人のおもひしとこそはなれ

うちより太親へも女房たちに侍りける
うた拝は流れかりけるに

備中内侍

はるかなるはまそてしもらしほなれ
たつのよの人はつりやなるまし

有明にわかれし濱のまつかね住吉
侍て親王とともにまゐり人
のかいほうせて侍りける

大中臣能宣朝臣

すへらきの君のゆくすゑ神も
ふくめるはいはるゝをみ侍
いのちへたる手本侍るか中
よそに親王ともとのてよみ侍

増基法師

此まいつるのみはしとよりとまなれ

志つしのゝもりのしたのまぬかれね
題しらす　　播磨資基
よひのまはまよふことのはまもし郭公
あかつきはよをふかくとやおきつらむ
永萬元年六月五日於内裏
郭公の哥合によめる
やつとしもまのなとしもすゝほとゝきす
おもはまとまてきこゆる一聲
伊勢大輔
静圓法師

夜るよるはなくなるまゝに郭公
さみたれのそらもまちあへすなくわ
藤原兼房朝臣
夏のよのはとくあけぬとやほとゝきす
かくしつゝよるをまちつゝや
小弁
ほとゝきすよのまに数つもりつゝ郭公
なくこゑはほともなき一聲そかし
禖子内親王家哥合によめる
ほとゝきす人にかたらむこゝろ

よみ侍りけるに　宇治前太政大臣

有明の月たにあれやほとゝきす
たゝ一聲の行かたもみむ

京極前太政大臣之中将の時家歌
会し侍りけるに　郭公をよみ侍る

赤染衛門

あかぬ夜もきくよもとこそ郭公
待とそやまたやいそくらむ
よもすから待るもの成は
まつたよあつまるかなたゝるかな

相摸守にて侍りけるかへりてのほりにて
いつの東のもとにまかりけるにて
よみ侍る　大江公資朝臣

東路の思ひ出にせむ郭公
おいその森の夜半の一聲

謌事をとやまてよみ侍る

法橋忠命

ほとゝきすやそつ鳴なるらんにほとゝきす
あさいはのきとめまつらむしるかな

長保五年五月十五日入道前太政

大臣家百首歌合に遅桜と
いふことをよみ侍ける

大納言

いろ〳〵とちりしはなのなごりには
たれかいとはむ[illegible]

五月のつこもりに赤染衛門のもとにつかはしける

くれぬれは

[illegible]命婦

子規まつほとゝ思ひつゝ秋
[illegible]

郭公[illegible]

物おもひする人のとこはなかりけり
おほ月夜[illegible]

律師長済

一声も[illegible]
とも[illegible]

郭公をよめる

能因法師

神事[illegible]
めくるよもいとよなか[illegible]物さと

大貳三位

またぬよもまつよもきゝつ郭公
はなたちはなのにほふあたりは

小辨

ゆきてのさやくまつらん菖蒲
ひくおもひ宮いはぬものゆゑにけり

早苗とらぬあれ

曽祢好忠

のとやしものふかみいとゝ月は出たる
いそげやとさなへ先もとりあへ

永承五年五月殿上の根合
さなへとをよめる

藤原孝資

五月雨はいつもしくれぬをわたる遠
山田のとしへとはもりそぬ小

宇治前太政大臣家の三十講の後
歌合し侍りけるに五月雨をよめる

相模

五月雨はみつのみまきのまこも草
かりほすひまもあらしとそ思ふ

宮へ経長の権乃山荘にて五月
雨をよみ侍りける
藤原範長朝臣
五月雨はうへくらし小藤乃原はすゝ
みなきの乃ぬまはぬれはしつゝくて
橘俊綱朝臣
浪まくらとよせてこゑもしは五月雨
新乃みやこなにしは千年なかなか
題しらす
厳覚法師
五月雨ゐちとやかれまさのみなぬかな
よいろつゝみかまとふわつて
五月五日はしめて宿所よあかれて
よみ侍ける
恵慶法師
香をとめてとふ人あるをあやめ草
あやしく駒のすさめさりける
永承六年五月五日殿上の根合に
よめる
良暹法師
ゆくまゝの乃庭はしめのもとゝよろこひ

卯の花のさかりなるらむ[illegible]
右大[illegible]わりよ[illegible]のまきはすこしかな
[illegible]るしなきかな

大中臣輔弘

のやかへすしもしとめ文菖蒲草
ころのそら[illegible]しとめなから
今年もふるもかはらぬ[illegible]すなにとかなかれ
かは[illegible]まてのしけ五月五
日ころまつ

伊勢大輔

くふしさす[illegible]やまかしにやあやめぬる
[illegible]まし[illegible]ふしゆ[illegible]ぬにけり

菖蒲をよめる

相模

五月雨のそらなつかしくにほふかな
花たちはなに風や吹くらむ

大弐三位

[illegible]しとしとかはらぬなかのかきはしてく
あまつ[illegible]つかのおもひいそかれの
ほとゝきすこゝろまつれる

源重之

我とも嫌て思ひけるよ桜るらむ
ふく風しもわれもなくしなかわすれかね
宇治前太政大臣三十講乃後歌
合し侍けるに桜をよめる
藤原隆経朝臣
さくらはなにほふなこりにおほかたの
乃春さへをしくおもほゆるかな
題しらす　能因法師
心あらむ人にみせはや津の国のなにはわたりの
うちもとへとおもひてありける

源重之
なつかりのたまえのあしをふみしたき
むれゐる鳥のたつそらそなき
曽祢好忠
夏衣たつた河原乃やなきかけ
すゝみにきつゝならすころかな
氷室をよめる
源頼實
なつ乃日になるまて消ぬ冬氷
春たつ風やよきてふきけむ

夏夜月といふ心をよみ侍ける　右大臣

すゞしさ乃夜の月ハほとなくいりぬとも
やとれる水にかけをとめなん

大貳資通

ふりまさるハ雲もさへすゝしと思ふ夜ハ
いはまよりくゝる石井乃月

宇治前太政大臣家三十講乃
後歌合によみ侍ける

民部卿長家

夏の夜もすゝしかりけり月影ハ
庭しろたへ乃霜と見えつゝ

中納言定頼

とこなつ乃まちかへる庭ハ[illegible]
秋[illegible]

六條右大臣家夏歌合に
よみ侍ける

能因法師

みなつき[illegible]
[illegible]

題しらす　　曽祢好忠

おきて見んといもかかきねにさやらん
我ひとりぬるとこなつの花

平兼盛

なつふかくなりそしにけるおほあらきの
もりのしたくさなへて人かる

夏夜すゝしき心をよませ給ける

堀河右大臣

ほともなくなつのすゝしくなりぬるは
人にしられて秋やきぬらん

首夏有明月といふことを

内大臣

なつのよは明ぬる月を見るほとに
峯をもしまて風の涼しき

俊綱朝臣の家にて晩涼如秋と
いふ心をよみ侍ける

源頼綱朝臣

夏山のならの葉そよくゆふくれは
ことしも秋のこゝちこそすれ

屏風の絵に夏はらゆく小

倉乃山みねふるかの雨とともあ
ゐ
大中臣能宣朝臣
紅葉をゝしむらくちらすまて小倉山
秋まつ程の名にそたつらむ
侍りける
兼輔入道 源といふ心をよめる
源師賢朝臣
ときよりもきいは井の水の音すゝしく
むすふ手の袖も涼しくなりまさりけり
六月祓をよめる
伊勢大輔
みなとも なかれにはらふ みそきかは
ふみしかたの
のそみつゝ みなかみに

後拾遺和歌抄巻之第四

秋上

秋たつ日よめる

よみ人しらす

うちつけに袂すゝしく覚ゆるは
衣に秋は来たるなりけり

恵慶法師

あさちはら玉まく葛のうら風の
うらかなしかる秋は来にけり
[illegible]

[illegible]

大かたの秋くる[illegible]
[illegible]

七月六日[illegible]

小弁

[illegible]七夕の
[illegible]

七月七日庚申にあたりて侍りけるに

大江佐経

[illegible]

猶ねより小あへにかけのきりのねをも

七月七日よみ侍

小左近

七夕はあさくひくいともみちつこ
とくとやかけつなのなきとかなしかるらん

七月七日宇治前太政大臣家にて

牽牛女云志心を

久方のやまのかはとくるけふとたえて
あまいつく待けるは

堀川右大臣

七夕は雲の衣をひきかさねかへさで
かへさぬめるやと夜なるらん

七月七日かちの葉にかきつけゝる
よみ侍

上総乳母

あまの川とわたる舟のかちのはに
おもふ事をもかきつくるかな

長能家にて七夕をよみ侍

能因法師

嫁の夜をとあまつもこひしのとい星逢
まちみし人の待ふはまつとかる

七月七日よひよみ侍

極之信

織女のあまのかはらの絶えずしも
くる月ことにわたりやはせし

左大将通房

まちわたるたなはた一夜はわきて七夕の
あふことはにほとゝ思ひましりかは

七月七日おとこのふみをとふとてはいひける
もいつるといひ侍るつかはしまりし
杉かきあたいのつまをとかへ侍る

新左衛門

わすれにし人をかへせやあまの川
いまはまちみつそらなかなのそこともと

七月七日風をいてゝ吹して雨降侍るを
夕まくれまとふとゝもにわきて八日もそ
もあるへきに事よせあるへしとなきまくれ侍る
久にあはむ

小弁

たまさかにあふせもかはるたなはたは
ことしもほたやあかつきとおもふ年

居易猶到香山ゆかしとよみ侍る

為家中納言経家卿下

いさ[illegible]山のはに
[illegible]あかる姨捨の月[illegible]
く
定[illegible]朝臣
[illegible]
[illegible]

左近中将公實

月[illegible]秋のよの
[illegible]人[illegible]秋のよの
[illegible]
[illegible]秋の月[illegible]
[illegible]

大貳高遠

姨捨の夜の月見に出て[illegible]
[illegible]

三條太政大臣[illegible]左[illegible]

[illegible]

[illegible]秋
[illegible]
月と[illegible]

卒[illegible]

[illegible]
光[illegible]姨捨の月

法性寺入道太政大臣家にて十五夜の会し侍りて嶺
の月といふ事を　源為善朝臣
大空の月の光しさやけれはあかつきにけり秋は
ますみの山も雲はかゝらし
河原院にてよみ侍りける
恵慶法師
すたきけむ昔の人もなき宿に
たゝ影するは秋の夜の月
題しらす　永源法師
もちはなかいゆかしもあかりまし秋の月
らゆあるの人もまつらむか
義人まねきての殿菊殿の月ちと
ゆきとめらいてよめる
源道済
よそなれと雲の上にて見る時も
秋の月はかはらぬ物を
貞和元年八月十日内裏歌合
藤原長能
よゝに侍る
ほのかにも見る月影とおもへと秋のよは
いかなるほとにもをとるの侍りなん

八月ばかり月乃雲かくれけるを見て
よみ侍ける
右大将公能
もろこしも夜もおなしく見るらんを
思ひやるらむ秋のよの月
廣沢の月を見てよめる
藤原範永朝臣
住人もなき山里の秋の夜は
月の光もさひしかりけり
帰里侍りける所にてよめる

素意法師
とふ人も思ひたえたる山里の
ゆかしさもなくてやみまし梅のよの月
題しらす
源國信
白妙乃ころもの袖を霜かとて
はらへは月のひかりなりけり
八月十五夜をよめる
惟宗為経
いにしへの月のこよひをはつきなく
神代はよそにしもあらさりけり

堀河右大臣

夜もすから空すむ月をなかむれは
秋はあくるもしられさりけり

藤原隆経

夏まてはいとひしかともまちわひぬ
あはれなるかな秋のよなかの月

赤染衛門

と夜よりもこよひあはれに人ならは
いつこもかくや月もさえけん
誰とかはまし見し人もなし

秋も秋こよひもこよひ月も月
ところもところ見る君もきみ

或人云賀陽院殿にて八月十五夜月あか
ゝりけるにあそひけるに宇治前太政大臣
かくよみ給ひけるは光源氏の物かたりに
かけりとそいひつたふ

清原元輔

いろいろのもみちをよそにみえしかは
ちるまかひにも錦やつける
をきもせのあきの錦をきよらなる

とやくまやまちかへるらん夜の　大江嘉言

くるときゝ枕るやまゝもの鐘

とし〳〵めるかりもしらぬ秋の　前大納言公任

なかめする松くまつゝ小鈴のまつかけ

なし　四条中宮

うつりゆく人もなきよをさへとも

わかれての後もあはれのこしゝ

長恨歌の絵に玄宗もとの所にかへりて

虫ともなき草も枯わたりて

帝なけき給へるかたある所を

よめる　道命法師

ふるさとはあさちかはらとあれはてゝ

よすからむしのねをのみそなく

題しらす　平兼盛

あさちふの秋のゆふくれなく虫は

わかことしたに物やかなしき

大江匡衡朝臣

秋風に小鈴かもとのまつ虫も

流井まいつとなるんとしとらん
前参議雅有
あさやけのよりもれの松かきわかれ
過ぬ跡いつか月のまよいさ
寛和元年八月十日内裏歌合
よしたる侍
前大納言公任
わか恋のみそきまくれ山もまれとせ
なきつらむかつ今まての輝
之つきつけくいつはる房乃筆々
やおもむとやすくもなるる
赤染衛門
おきもゐぬわかとこよいこのねし
春帰るまてのつきもなくわか
後冷泉院御時后宮歌合によめる
あれ
伊勢大輔
ここのへかくゆきすもいりそめし
秋乃つねのかや夜ももすかるん
八月十五夜の月のこともなきめ
よみ侍りけるせんてる
周防内侍とふへしや
摂津

清輔

まして[illegible]

[illegible]

八月駒迎をよめる

[illegible]道済

逢坂の関の[illegible]

あふさかより[illegible]月の駒

源縁[illegible]

[illegible]

[illegible]

屏風の絵に駒迎したる所をよめる

[illegible]

恵慶法師

望月の駒[illegible]

あ[illegible]

[illegible]

[illegible]

源[illegible]朝臣

[illegible]

[illegible]

公基朝臣丹後守にて侍りける時
国にて歌合し侍りけるによめる

源

鹿の音す萩にしからむ二秋の
尾上の松は風よりもなしとも

萩盛待鹿といふ心を

清範

かひもなき心ちこそすれさをしかの
立声もせぬ萩の錦は

山里に鹿もとおもひてさはる

大中臣能宣朝臣

秋萩の咲くにしもなど鹿のなく
うつろふ花はおのが妻かも

宇治前太政大臣家の歌合によみ
侍る

源為善朝臣

萩の葉もとさへつゆこそぬれ
まなしの露のむすぼつる

鹿の音さ

藤原

安法ゐし

あきはぎなる萩をみなれ葉

思ふやまつの風ぞなる

能因法師

嵐いたくもみちのとゝもに三輪の
乞とし聞しのも夢なりけり
夜宿野辺に聞とゆ(?)めなる

厳覚

こよひこそ鹿の音ちかくきこゆなれ
あれのゝかきねは秋の野らなれは

藤原長能

宮城野につまよふ鹿そさけふなる
もとあらの萩に露やさむけき

祐子内親王家の歌合によめる
[illegible]

大弐三位

秋霧のはれせぬ峯にたつ鹿は
こゑはかりこそ人にしらるれ

藤原家経朝臣

鹿の音そねさめの床にかよふなる
小野の山への秋やきぬらん

江侍従

小倉山たちともみえぬ夕霧に
つままとはせる鹿そなくなる

題しらす　　和泉式部

秋ふくはいかなる色の風なれは
身にしむはかりあはれなるらん

天台座主源心

残なき命をおしと思ふかな
やとりの秋のすゑをみむとて

橋恵

のはらの萩もさかりなるよめ
の雨

伊勢大輔

おほかたのつゆとおきぬる荻の上に
なにとなくものかなしきは秋のよの風

見るへきものとなるへかりける

能因法師

思ふ事なけれとぬれぬ我袖は
うたゝあるのへの萩の露かな
萩の錦なる小萩の葉末をみれは
人ことにはつるはきみかな

新左衛門

あはれなるをみなへしの花の露
やのそこにおきゐる人もあれは
おなしいつともしられさりけり

中務宮女王

人しれす物思ふやかるかや萩秋の
ねさめのほとよそにそ露のおきけると
八月毎日よりも八重の都につきたる人
の絵よりなかりしあはれ

和泉式部歌

かゝみまても見えんすいはゆるの雨隠れなる
宿ときみはれ萩の上へゆよし
いつかたしらぬ人の心よりなれを
ある萩のまゝし吹くさぬ給へなむ

身恨みいかりけるを秋も見ん
きはのはひつゆやかれ

藤原氏母

しら露はいかにおきけるやおもひ
やまとねなみはあきに萩
宿の萩とくちるものはいたゝし

橘則長

よそにあそふも秋のはなの萩の
さくらたにおき小萩の野
伊勢のおりふしを秋はき

源時綱

君かくてあれはなれぬかなしさよ
うつろふなき秋の松かせ
藤原通宗朝臣
梅花り下葉やもみち散ぬらん
小かきりにしてり鶉なくなり
草葉まちの露もとゝまる哉
藤原範永朝臣
しくれふる露藤原の露のさむし
橘まやしのゝ萩のもとをとめ
春ともみえぬ後いく小田をとふ
ゆきちと遠はてぬめる哉
源道済
伊ゝ小野の萩乃錦乃香のにほひを
しかも錦乃心地よりも
鹿をとくし
藤原長能
とこの小乃もとくあきちの来にけ
かへりてぬるゝしく春のえ
寛和元年八月七日内裏花のえ
今まよみはなる哉
橘為義朝臣

めすましておもひもぬる山さとの月を
おきの葉にむすぶ月かけのなかき夜

寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり秋の暁
まきたつ山の秋の夕暮

右大臣家の歌合によめる

源親範

秋の暁はあはれなきを毎ときくよりも
こゑして行毎に夜のあけもとかねも小
槇の戸を荒しふるの小お山のきたけ

なかなかに山のはちかき月かけを
みるこそ

大中臣能宣朝臣

山寺のかねのおとにもきこえねば秋の暁
ながきよとおもふ心のあやしさよ

人のみはなにのちかひもなき物を
ながき夜をあかしかねつゝおもふ身は

藤原太夫

世の中のうきもつらきもいとふこそ
なにしろ人のためなりけり
上東門のこと載山ちかき暁道

よ海のまもまよひきのなかれのいりぬる

橘為去

なかそらにまよふあすのほのかなるしらくもの
しろためるかもしほかせのふかきかな
影さへそ見ゆ

玄律師

秋風にまたしらぬまに海をふかきも
いつくも野への花のみなるゝ

三唐清晴晴日清角風小暮猿啼

ゆきかせの野へは猿人やとかけるまへともなる

清原元輔

夜かけて明ぬるまよりくものかへるもと
にもかねつまつ人をまつとなくなりなん

毎夜有秋といへることを

法覚

宮こそ松の野路なるとはやなほ
おもかけのまなく見しより
たゝしきと

源為済

よるのまのうつ小松のかすみたつ
はなのたよりとなくはかなしとも
おなし花とをよる

和泉式部

夕まくれたゝの荻にもいつとなく
きゝしるもいかなるはのかせ
題しらす　源道済
いとゝしく物おもふやとの荻のはに
秋とおつけつる風のわひしさ
村上御時八月はかりうへひさしう
わたらせ給はてしのひてわたらせ給ける
をしらすかほにてことひき給ける
斎宮女御
さらてたにあやしきほとの夕くれに

荻吹風のをとそきこゆる
[illegible]右大臣家歌合に　[illegible]
よ荻風をよめる
荻の葉を吹過て行風のをと
まつはたゝの袖をもおもひし
資忠朝臣
つゆかゝる
三条小左近
とふ人もなき
荻の葉の
こゑ

ゆふさへハところまかりけれは梅風乃原かわ
なる夜むとしとこみつて侍る
花の菓てり　僧都實誓
ちりもよしめくみなつかしなたのめる風のまた
暮ら落る今はしら梅のゆくへとくよ
とふもわかゆらくしも詠にいとつれは秋
風とこそ原
おきつきも居てとうきしそたる袖ぬれ　藤原長能
あれしらは小松にきぬるかえつるし

山里乃霧とこしなへ原　大納言経信母
ゆふかすみ川風乃香まさるとくとや
ちとひかへりの人あつるかなしきる
おほゆ右大臣殿のよきもかかるよなる
藤原隆衡
ところまて花風乃すゑにいかに花る
くるとも方にかよはれよ
露毎にもみちぬるとおとろかれ
源師賢朝臣
はなつ

せくゝたかきゆかしと流るゝ秋の野に
いとゝしもよの萩まさるこゝろ

天暦御時屏風に八月十五夜
ある家にて人ゝあそひする所

清原元輔

とことはにめつらしきかなこよひの月
花はいろいろの秋のよをもつれ
月よまちけりて水の色秋もおなし
たれかはしる
水の色も小萩のうつりたるをとめて

大中臣能宣朝臣

千世のみ萩はしめてぬるかな

庭樹秋萩といふことをよめる

関白前左大臣

わか宿の小萩の原のしら露を
萩か枝にのれん人はたゝや
思ひの花とていかはよそに見る

源道済

秋の夕は思ひいつはりたのむや
うらしめの萩の原の人はいはなん

橘義清

清の萩の原のよそのをみなへしにかはる

庭の松の葉毎にとけしくみをとしらむとよ
かな　源兼長朝臣

もみぢ葉のちらくとくの葉もとうへはふる
庭の言のはの里や野辺まさん

ゆふされはいとゞみにしみてうつらなく
しつの言のはのめ野辺とさする
まいりきて　うらみ逍遥法師
ときはゝきゝ小屋ともさともたえなく
いつくともおなし梅すゝきふる

山里に小萩のうへを海まものゝむすひける
たのむ小萩おもしろき行々秋の
しらぬかな　和泉式部

あきのつの八人ものまたのあへすこそ
萩おもひはいまそこに
秋の月のみつくし

新後拾遺和歌集巻第五
秋下
永和四年内裏の六首の歌合に擣衣
といふことをよみ侍りける
中納言資経
唐衣とをちの里のひゞきにもうつ音寒く
そめもとの○のこもしらぬ夜はのさむさに
伊勢大輔
さよ衣山よりおろす風さむみ○いかにねよとか
いそく○のしよりにきこゆれ
藤原兼房朝臣
うちそふる○のよやふけぬらん唐衣
ころもうつなる里の[illegible]
藤原長継
まつかぜの夜さむにかよふかりがねは
おりの○のよやふけぬらん[illegible]
月のおとずれはてしたえにけり
醍醐入道
九月十日あまりのころ[illegible]
まれなくかかるわ[illegible]

まち(?)えたるよハ(?)ものおもふ(?)とにやとよめる(?)
こゝろを

兼房中将
月はよしはげしき風もおともせず
わがよをしたふ(?)秋ハかなしき(?)

山家秋風といふこゝろをよめる
大宮越前
山里のしづの松がきひまをあらみ
いたくなふきそこがらしの風

源道済
影さへ(?)にすみ(?)ものを
乃庭をハ(?)みえ(?)ずもわかれ(?)山里(?)

ねられ(?)ぬるよハ(?)ひとつまたぬる(?)
永承四年内裏歌合に
堀川右大臣
あすの明(?)に松のみね(?)よりもみぢする
いくその山の紅葉(?)もこの(?)
宇治(?)よりも(?)紅葉をもてあそぶ(?)
ゐなといふ(?)ところ(?)にて(?)よめる

藤原経衡
わたつ(?)みのうく(?)あはれ(?)紅葉に
乃(?)
のこりなく(?)紅葉ばかりは(?)ちる(?)

長[illegible]ありまへにけるとき人の[illegible]
このよには[illegible]とゝめ[illegible]
きハしらぬ

上東門院中将

このもとを[illegible]
しの[illegible]乃山[illegible]

右兵衛督[illegible]小車[illegible]
[illegible]

藤原兼房朝臣

[illegible]
[illegible]

紅葉ちるもと[illegible]
今[illegible]
[illegible]

右大将道綱

[illegible]
秋[illegible]

西京に住侍りける人の[illegible]
[illegible]葉[illegible]

恵慶法師

[illegible]
[illegible]

中納言定頼
しくよはにわたるらん
菊ゆゑをしくなかりしかは

大貳三位
つらかりしおほくのとしはわすられて
はかなくもつゆをおきしく菊の舟
上東門院菊合に左のとうつかうまつる
とてよめる

伊勢大輔
めもかれすみつゝくらさん白菊の
花よりのちの花しなけれは

前参議義忠朝臣
世にふれはうつろふいろのしら菊の
うつろふもよしとやみつゝのこすらん
後冷泉院御時后宮歌合に
残菊をよみ侍りける

大蔵卿長房
紫にやしほそめたる菊の花
うつろふ花とたれかいひけむ
菊の花おもひしまゝにちりもせて
のこれるほとのうつろひは

はかりつゝまつ　赤染衛門
おとにしゝかりつる所ものこるそと
見えにけく人はみちまよふとも
天暦御時御屏風に菊をよませ給
ひける所をよみたまへると
清原元輔
うへしとくはなまちとほにありし菊乃も
ちよやへむ秋のもとにわかれてくらん
屏風の絵によき菊のさけるを
なかまたつまつ人の家ある所

所をよめる　大中臣能宣朝臣
かはきしにたちよる人はしら菊も
うつろひぬるをしきものとや
家のとに咲たる菊のさかりにおもひ
見けるにしらぬ人の九月はかりに菊の
流ろいて侍りけるにつかはしける
恵慶法師
しら菊のうつろひゆくそあはれなる
かくしつゝこそ人もかれしか
相摸　をんへわかれまことをしのはれし

中〻に[illegible]

[illegible]侍

有家経衡

う[illegible]人の心[illegible]

萩[illegible]

五條[illegible]

秋[illegible]子[illegible]の葉[illegible]

[illegible]

中納言定頼

[illegible]

[illegible]

永承四年内裏の哥合に紅葉

中納言資綱

[illegible]紅葉[illegible]

[illegible]

寛仁二年正月入道前太政大臣大

饗し侍りける屏風絵に山

[illegible]紅葉の[illegible]

[illegible]

右大弁公任

[illegible]紅葉[illegible]

[illegible]

屏風乃絵に山かつのかきねに女木乃
もとにてもみちをもてあそふ
ところをよめる

平兼盛

唐よしの葉いろ/\まゝに紅葉乃
ちりまかふ木のもとは立よる人の
山里小ものゝわひしきよりなりけり

清原元輔

もみちはに入日さしてをくら山里乃
ことゝふともなく袖乃ぬるゝは

月前紅葉といふことを

清輔

紅葉ゝの雨とふるなる木の間より
あやなく月のかけそもりくる

落葉水をうつむといふことをよ
めり

清帝清蔭

もみちちらく水かくる梅乃山乃遣水は
さてハ紅葉によわるこゑなみの秋

加茂部親王大井河にまかりて
かゝるまて紅葉のちるをみて作れる

堀河の右大臣

みなかみに紅葉なかれて大井川
むらこにみゆる瀧乃しら糸

大井川すそよりこそ傳侍

中納言定頼

水もなくみえこそわたれ大井川
みねのもみち葉雨とふれとも

永承四年内裏乃歌合によめる

能因法師

嵐吹三室乃山のもみち葉ハ
たつ田の川乃にしきなりけり

歌たてまつりし時　藤原家経朝臣

見わたせはよもの木すゑ[illegible]
梢いつくしかはれ[illegible]

後冷泉院御時后宮乃歌合
しくれけれ

伊勢大輔

紅葉乃色ハ山田[illegible]
こそ[illegible]

師賢朝臣梅津乃山庄にて田家

秋風といふ事をよめる

源親房朝臣

宮ちかき山田の小田にかけて
吹秋の風を小嶋のせそくみなれ

宇治前太政大臣家歌合に秋田を
よめる

相模

稲乃田りふきよるといふ山川の
水の月とえともなくなきわる

源頼綱朝臣

夕日さすすそのゝすゝきかたよりに
まねくや秋をゝくるなるらん

九月盡の穢らまおもしひをよみ

藤原範永朝臣

めつらよりわたさしいまといはむもや浮ちつき
花なく桜もとしもなたゝむ

九月盡日後冷泉桜をとくみ
ともよつゝ行かる
あくみえは聰急をとまりのなきも落
まゐくりしうゝは秋まかへし

九月盡の心をよめる

法眼源賢

秋ふかくなりゆくとみすまれぬ
ねゆくきつすえへあかにくるゝ

九月尽日伊勢大輔かもとにつかはし
ける

大弐資通

こひてまる人もなきかなとゝまらぬ
さるゝまゝにをしむかな秋のわかれを

九月晦夜よみ侍りける

源兼長

夜もすからなかめてたにもなくさめん
あけてみるへき秋のそらかは

続拾遺和歌集巻第六

冬

十月乃はしめつかた人々おほく乃こゝろを
大井河のほとりにてよみ侍りける
よみ侍
前太政大臣
名のみして中々もみちもちらぬ神無月大井河の
みるもあかれぬ秋はいとはてもありわ
十月朔日ふりける紅葉乃ちるをよ
める
大僧正深覚
手向にもとりあへず紅葉乃錦をも

神無月よそのひとりまつの秋
建保三年十月今上清涼殿将乃
みよ大井河のよみちまかりて給
てうせ行へかな
清輔
大井河のふかきもみちを
あらしの山のはるかにみゆる
あはれなるもみちも
従三位兼房
嵐乃山のしくれ乃雨のふりまさり
はるかにみえて
あられもふりまさる時雨

とふへき人もなきまとにかゝるよ
山里乃時雨をとのみきゝなれ　永胤法師
神無月ねさめくるに木葉わ
きつけてしくれふるこゝろの里
落葉如雨といふ心をよめる　源頼実
木葉ちる宿はきゝわくことそなき
しくれする夜もしくれせぬ夜も　藤原中納言通経朝臣
み葉ちる音はしくれの秋ならて
木葉ちるらんくもとわかるる
十月はかりに山家にとまりて
よみ侍ける　能因法師
神無月ねさめにきけは山さとの
あらしのこゑは木葉なりけり
宇治まうて関白のともにまかれ　橘義通朝臣
ひしほ山もみち葉ゝちりはてゝ
よしもとなしかみのこゝろ

山路にもわれこそありけのこゝろから
ちとせにこえてありけれ

中宮内侍

うち川の早きせにはたちわかれつゝ
あかのしかわれのいとひとなしなき
後撰集下清滝にそ絶えぬ河のなかる
もとよみ侍りけるにしも侍

前東宮亮

霧りしかゝるやの川瀬に寄する
鮮まやともの入るちらしまれ

永承四年内裏の歌合にさくらを
もみちをよみ侍りける

権の大夫

さほ河の霧のあなたになく鹿の
ゑにはてぬ物をまつ有侍

相模

たまくらの野にふくしらすちともわ
うつたへにとる輔ときゝわ

和泉式部

恥さうまて
さらにしもへしつまきたえたる心も見え

さいはらまく梅か小松か山里

冬夜月をよめる

大弐三位

しも枯葉におきしかねわかるらん

あはれいつかおもひよるの月

たいしらす

増基法師

冬の夜はいくたひはかりねさめして

ものおもふやとの日やくらん

清けに雪の朝庭雪をよめる

をとみゆる

民部卿長家

とやかくるしらぬの庭よそにみてさふらふ

雪のあしたにちりのあとつけつつよめる

庭雪をよめる

能因法師

うちしらぬ雪もやまかすんこの野の

あとたえてこぬ人をしのふかりけり

律師長舜

藤原もはやくもれわたるの野ゝ

やまはふかきもとのくもまにふりて

同風ふくよしも月は女の

[illegible]

人の音もしなくなるまてとよめる

大中臣能宣朝臣

秋の野の草の戸さしはなけれとも
あへての人をいかてものかは

霜の秋の草をよめる

少輔

秋の野は色とりとりに錦すれ
ちくさにうつろふ野辺はまたしや

秋萩の葉もとうら色に見えぬとも

よみ人しらす

荻つゆる庭の木葉とよめる
しろたへの露をとちしかと（?）

霧をよめる

大江匡賀朝臣

枝の枝もと海へ行くみかせの身のよ
おとろくはかりまたうちみる

山里の時雨をよめる

橘俊綱朝臣

とふ人もなき山里のさひしさを
時雨をも人まちとはしらねは

永承四年内裏歌合に

しらす

相模

おほもしら雪ふれはいとゝやまのお
まきのはもえこのはたにまきるらん

堀河右大臣家にて

素意法師

うつみひのあたりははるのこゝちして
ちりくる雪を花とこそみれ

源頼家朝臣家にて松上雪と
いふ心を人々よみ侍けるに

藤原國行

あは雪も松のうへにしふりぬれは
ひさしくきえぬものにそありける

陸奥守にて下り侍けるに時便
まうてきたりけれは

紀伊式部

いつるとてひのしのいはむことのはも
松きはふることとり思ふをやは
し雪とともにそくらしつる

能因法師

もろともに松にいはむとおもひし
らぬるまに雪ふりにけり

題しらす　源道済

ふるほとも雪ふるころはとことはに
山のはしろく月そさえける

慶範法師

あしたもちかくれゆく雪にあとはかれ
いまやくるやと人はまつらん

右家女房

ふりつもる雪なれはいさしらすとも
井手のさといふらん人もまつらん

詠雪といふことをよみける

津守國基

獨ある草の庵はけふしも
ふみつくる雪をはらひつゝ
庭風如絮よ雪ふるまゝに前に女
乃ふさよるかたもなし

赤染衛門

まちやくる人やとふともまよはれて
とのゝ山のきはも雪のうちにめくれ

道雅三位の家へ除夜の庚申によませ
よゝのはしめにまかりて門のほとりを

題しらす　　　　　　　　　　藤原経衡

雪ふかきみちもよらしらさき山里は
そのわたりまいに人こそなけれ
清なはたなとてふみかの人にかはる雪けさぬ
人のなけつゝける　　　　信寂法師

おもひやる雪も山路もふかけれは
かへるる人のとこよ

題しらす　　　　　　　　和泉式部

まつ人のいまもきたらはいかゝせむ
ふままくをしきにはの雪かな

天暦御時の御屏風に十二月雪

深山とそみる　　　　清原元輔

としをへてむめとしく雪とみゆるは
としのこゝろまねは梅ともしられ

雪ふりける朝よめる　　　大納言公任

しらゆきのふりつゝ流山家

入道前太政大臣

おそらく雪つもるらんとおもへとも
君ふるとはまつとは済

雪深く侍りけるあしたに

くまなかりける

右大臣公経

[illegible]ハとしとしもかへりまする
いつまてたのくたわ[illegible]るせと

湖水ちとりといへる心を

頼[illegible]法師

さゝなみのいにしへとしふかきしめのの
あしまのまよひかねなく千鳥かな

[illegible]

[illegible]覚[illegible]

ちよ夜かはらぬみよにやあらん
とことはにみちすへきのつゝのあらん

入道前太政大臣の家のとしよく
冬の夜あらしもとゝめかね

権大僧都長舜

かしのみとりのみつ[illegible]
こやの池の水うへにもこほりてまちのこほる

影さくらを

前参議雅経

岩本のいにしへさくらのかけのもとたちは
そなたにあらしのいもてはなちこそ

湖上夜

前大納言為善

さいこの乃よとへてこはするしの月の光

春とゝめまやにほふもたへつ屋まて

後三条院東宮と申ける時殿
上にて人ゝとしのくれの
心をよみ侍りける

藤原明衡朝臣

しほかぬよし雅のうちはいまはわ
我もよりとしの香つもりまてに

十月はかりにまかりくたりつゝ備中國よ
りまて出羽のかみのもとへつかはしける

源為善朝臣

京へ人はとしとゝもにや帰るらん記
尾のうへみかりのまもとも
北の人のへよつかり

後拾遺和歌抄第七

賀

天暦御時御屏風子の日

源順

くねとくらふゝこまつのまへにはるらし
ちとせのまつりありあんちよまてもと

入道摂政の賀し侍る屏風によみ
人々の擣絹うきくる所をよめる

平のかねもり

くさうも家あゆふのらの擣乃しいく(?)
くもまてもとまくもはもかゝらね
おなし屏風に武蔵野の所をよめる
あゐ侍りけるところをよめる
むさし野もとの雲方の咲男にこひやさし
ねくしともとまいはちくらむ

東三條院四十賀の御屏風に子
日して男女車よりおりて小松ひ
く所をよめる

源兼澄

雲としへたふりのえのまつかれもせす
きかのまつのちよしるらしと

右大僧正明尊九十賀し侍けるよろこひに
僧都あまたまいりて侍けるに
中にことよめる　前律師慶暹

君かよをいのるとしのひさしさはなにかたのまむ
花のとしへてはなちるまてにいそくらん

同書清屏風に人家あるのき（ノ）の常
松露あまたとしへてあるを　平兼盛

ふる雪もとしをへてこそつもるらめ
まつとちよをへてかさねるもの

屏風の絵に小海のほとりに松一
本ある所をよめる　源兼澄

一もとゝおもひし川のきしにたてるまつのもと
いくそのよをかへてまたちよをかそへん

題しらす　よみ人しらす

君かよをなかへとおもへはたかさこの
まつのかけとまつもちとせをそへよとそおもふ

後一條院生れさせ給て七夜に人々
まいりて侍るに女房さか月いたせと侍

今秋ハ　基俊歌
たかき光をしらふたつの月をそ
もちゐるにもあらぬゆゑもなくさめ
枕草紙にかきしをりせ給ひて七夕よ
よみ侍りける　大納言公経
いとえなきこゝろの袖ハ秋ゆへとも
こゝろのしをハおもてつゆけきん
我さへまで　夫人　まで
思ふ比のまめにも見えぬを清
かたいかハいかつかたもしらとも

ある人のいはく七夕よりも中納言の歌
つよくはやとりいへり
故事一説に世をのかれ給ふこと
なみだにかきつくせ給ひて　四条歌に
うれしやとおもひたまへしにうかゝひ
新より佳作のありしかたなし
右大臣　顕房
えにしもまことにむすびのいふ
あはれなるまつの二星かたらひ
中務敷こもはせ給ひける七夕より

よみ侍

清原元輔

応和二年大嘗会風俗のうた

千年へんとおもふ事をもむ

しまならて君ののかすかそかへ

もまそしておとかはる

赤染衛門

雲居にて人より先にきく

ものは君ふみなるらん

日もちかくきみ侍る

千代をいのるみやもなる

きのくもゐの風にたち

太手一親王のいまだおさなく

おはしましけるに家

ものまもるもとのいはぬ

関白下藤より侍る

侍るかきえてよみ侍

大弐

千年ふる二葉の松にかけてこそ

藤のわかえもはるけかるへき

後冷泉院親王にておはしましける

まへ海をと行たかまれ

花山院御製

思ぬ事いまくはおもふなをそこの
もとくりのまたわぬとかた人ハ

後三条院清子の宮とやうる時まて
上おもふくおつまゐりけるにわあ
おりゆみこそこまいせの継は鏡ちと
かへよとそたまはせゑまくりよある

伊勢大輔

君か代はちるまもくもし万代を
よりひさのこもまれのこかうの時

在て　　関白前太政大臣

曇なき鏡のひかりましくも
てらさん世のけてくまをそうめや
むまのこのおとろかれもと関白内侍の
はそく後に藤のこの氏の子まさを
くよりいひよきやそ侍ん
思日出よまる
河在つりよつつしりかれ

藤三位

おもしやまきまるいゝ藤のゆすのおもかけき

ちよもとなくなる鶴のこゑのはるけさを
紀伊守為光
花咲てあさからぬ人の心をはいふなる

清原元輔

万代をまつのみやこに君はいきの園は
ちとせのかけにまちわひたれ
人のゆきかへるよしもかな
住よしの浦はまてしをかけにきて
なをきかへりてまつのうしろにすみそめ
人の心をしらぬ人の子はかなの

参議伊衡
ちとせまてかゝれとつゝみゆく
かくとしもあれ

源重之

なかよあまりいちとせの人かゝる
小松原やまのおもかけ
大中臣能宣
風のおとにきこゆるなる
ちとせをへなる

藤原保昌朝臣
かくれなきあさゆふことのつねならは
この人のこともまたひとつの風

三条院御子乃宮と申けれは帯刀
陣乃歌合によめる
大江嘉言
君のよハちよにひとたひゐる塵乃
しら雲かゝる山となるまて
承暦二年内裏乃歌合によみ
はへる
民部卿経信
君の世ハ尽きしとそおもふ神風や
みもすそ川乃すまんかきりハ
宇治前太政大臣家三十講の後歌
合しはへるによめる
赤染衛門
思ふにもやそうち人の君かため
ひとつ心によいのるいのちを
永承四年内裏の歌合に松をよめる
よめる
能因法師
まさ日山岩乃松にまつゆ見え
ちとせ乃ことのハつきせぬ経る
おなし歌合によめる
式部大輔資業

君か代はいさゝめつゝ千代ともと
ちりまのかきりなけれはいま
冷泉院うめてうせ行て水ふと
きさき入たるものとの絵
かゝせ
後冷泉院御製
岩くらもをちなる人の後はをりそ
こよひよりかくもたえせぬ行末
東三條院女后宮と申ける時絵合に池の
浅茅たゝいまゆゝれてゆくまゝに
小大君

君かためくにのかなたにゐもかゝれ
けふしもかくもやうにと井ふ
関白前太政大臣家の歌合の
よみてまさふるはるかにの水たえ
ふかきてかくとかも人にもゐん
るか
藤原範永朝臣
ふかしもの梅さへいぬる水の
ちかひて行くらひて行もさ
後徳朝臣母はさとゝまゐるはのみち
さりける世ゝにすむそのさしてとまる

しもゐるまゝにうつろひにけり

還蓮法師

千とせふる松のみとりもかはらねは

松はいろこそかはらさりけれ

後冷泉院御時大嘗會悠紀屏風

近江國鏡山に松樹為生

式部大輔資業

万代に千代をかさねてみゆるかな

かゝみの山の松のえたまて

同屏風に大蔵山もとゝある所

うこきなくおほくら山をたてしより

おさまれるよのうこきなきかな

同御屏風にしみつのほとりに

ちとせのかゝみ

以信隆

むしろ田のせの千代のゆくすゑとも

さとをさかゆく

こゝのへのうちにまて

后拾遺和謌集巻第八

別

祭主輔親ゐなかへまかりけるに人のわかれをしみて
あかるよ院花山の紅葉なとはたつねよと
きこえけるをとまるとてそのこへかりける

恵慶法師

紅葉ちるおもひのこさん旅のそらかへる
ましきとおもふ井ともいふへきことの

祭主輔親

わかれゆく秋のわかれはいつもかなしきを
かくなりへりまかるに人のもとへつかはしける

秋乃わかれはいつもとりわきめや

のこりまつ人のもとにまかり侍りける
乃わかれはさきのなくよめる

源兼澄

常よりもいひかはしける人のつくしへくたりけるに
わかれのつらきことはなほ
人のもとへ東へまかるとていひつかはしける

増基法師

こひしさはいつまてとかはおもひしにかへりこぬ

名をのこさん人ハもとかくれのしるしハ
左近中将為基まゐりてまかるに
あなたとよそにかゝるやさしきかはよ
ひとやすみ　藤原道信朝臣
わすれその人もとせの花たちまとゝ
毎のみちやこちとおもひしをとよ
父のともに越後へ下りけるを
頭のおとゝまゐりわ　源為善朝臣の弟
よろつかゆる　藤原惟規
あまつとの花ちるさとにゆきもなく
とゝむるハ大の人をとひし　紀
田舎にすまわたる人へよりまよひ
あふみき流れにそとも
藤原長能
よみつるよはおもふよこのまえ(?)はかなき
あらはれてたえぬもなきまをと
三月のわたに藏人(?)藤原為正四(?)
よくわからぬにあまたかたきに
藤原隆家(?)のくまたるゝひつくく
はかなる
選子内親王

なく春と恨ゆるかなたつ舟をしは
いのちゝけふまで前中納言乃前
返し　藤原為正
新つちよりもとけにけるたえまに
いきかはさつゝおもひ合られ
人のともさき行まへわかるらに
藤原道信朝臣
たまさかにもあひよもとるよのまよ
まつにほとりけるみんとをもよとを
入道摂政のかれ〳〵に侍りける比大納言道綱母

ほかひ侍りけるに陸奥国へまかりける
ときゝんとてかへさともおもしろくて女
侍るいひて侍る
藤原倫寧朝臣女
君をのみたのむ旅なる心には
ゆくすゑとほくおもほゆるかな
返し
入道摂政
われをのみたのむといはゝゆくすゑの
松のちよをも君こそは見め
筑紫へまかりけるに侍るめのとに

ことしけくあるしなけれは人のもとにつかはし
けれは
湛圓法師
山の端より月かけみえて思ひいてよ
秋風吹きまよふとも忘れし
源則清朝臣下見もの色はえて
いにしへのうちにまちてかへりけるに
出立所にたまはるとてもふくさてとしまゐらせ
ける
相模
君ひくの千代をかそへん小松にや
もゝ色の雲よりいきのまつらん

嘉言対馬になりて下り侍るに
人のもとに流して侍りける
いとゝしくわかれの涙とまらぬを人の
帰るとき見まて待ちこそまかめる
対馬よりのわかれにまかり侍りける
松浦の浜のわか国の泪の中よ
つゝしかりき
大江嘉言
命あらはいかゝ見まし流の色
ふりくらし花のちりけむ露の葉よ

橘則光人のみちのくにへまかりけるに
よりかへしことにいひける
中納言定頼
わするなよわすれはてなむおもへとも白河の
きよしとこそめねともおもひ[illegible]わ
義通朝臣十月のなかころ淡路に下り侍
ときけるにあか月[illegible]まかり給
ひとまちてもかひて餞なとし侍る
かへしとて[illegible]よみ侍りける
橘則長
別路はたちかへるへきものなれと
あふ事は雲井はるかにへたつとも
藤原兼房朝臣のまかりけるに[illegible]
むかし作りたりけるとも[illegible]
花のころ[illegible]東やま
くまかりけるに花のちるをみて
あかねさすみ侍りける
慶範法師
たまきはるいのちもしらぬ[illegible]
はなとさくまつへき[illegible]

はなにわのちるまて人をはらふ梅か遍昭の
まつりつのいのる

大入さつくれ

ひかりへさす　かとさるくんまりく
なるとひらまかくりかいらのさ

花に　白雲路にし
名残多み命をとふかいたかくら
まてやくるとまつまつ掬を
雁聞帰雁　伊まる國に帰るへきを
かるより別を惜　みそよみ

藤原家経朝臣

春は梅梅は月にとちきりて
わかれゆく秋とおもひてかへる
雁聞帰雁　いよいよ花のわかれをしきて
おほろいよの帰かりはつれて
花まつ銭しく多くの雪もおち
はるもんとしは待つ秋は
｜

源道長

思ひはてたのみて帰ゆきつるも
春の名残はいつくそ秋

こしなる人のをかちの國に侍りける
はしつかはしける　源兼澄
思ひやるかもらへはとかこちあはな
かへるみちのうへもしら山をなかめて
能登へまかりくたりける人へまて
よそにてもおなし心にありし
とまるへきみちもしらすそゆかるゝ
ありそ海のうらのこなたのうらのなみ
讃岐へまかりける人に　中納言定頼
はるかなる雲ゐにかよふ風よせは
心さへそのへにとまりけり　思
在て　源光成
たかなかのわたりにてもなみのよる
まことにかへりゆかむほとはなみ
喜女のうへ讃岐に侍りける人
く餞にまかりけるをゝしみて
源兼隆
かりつゝきそへて人を送りつゝ
こゝろさしふかき人にはいつまてか

大江公資朝臣遠江守にてくたり侍
りけるにさつきの廿日ころ別れ侍りし
たりしをとしへてかへりまゐりて侍る
ける
源為善朝臣
見し人もなくなりにしかはかなしくて
なかなかやまちにとめてみまほしき
なへこそ旅のよのまくらとなる女の住
ところにしつかたなほたねのむすひ
とまりし程のこよひともなしはてし
いちのみちのとのそらにまつとこそ

しける
登蓮法師
なかの旅の行さまをも旅にてもたのまれる
ハかりよりのこのよのよひとつかさや
橘為仲朝臣
かよひてはつねにふかけれはかなし
なかのつかさる
赤染衛門
行人もとまるもいつれにおもひつゝ
わかれはたつのちのまつのわかれを
摘いたる女のいつこともなくてたのみ
きみをへなんとはゝそいつまて

中務宗忠

いはらしともさてくれかへりの旅すらし
侍りそなたゝるのえらん
女のもとへつかはしけるそのゝち
阿よみわくれて久しく女のもとよりわ雲
りきにひそく兵庫いかきよのつかせ
我るまてとりてけるなるすつ
つゆる

兼之輔親

為之事は宮井りのりける人々も
こはかくれぬにほとはいのくしもと

筑紫へまかりける時ひて

藤原節信

帰りてはたれをみんとかおもふらん
おいて久しき人はありやは
ゆくまてもあるものまゝにゆくすゑ
人を別れしをゆくよりあつ

恵慶法師

ゆくもとまるもつらしとおもふな
きしゝつれもわかいたくあるわ
出雲へ下りけるとて 能宣朝臣の行よ

流のかはら　大臣正云

あくて乃年乃みなやこりし伊かのそ

いまゝでとふとめつゝもへ乃板く

寂照法師入唐とんとて筑紫へまかり

けるとて七月七日船よりのせ侍るに

いひける

天の川のちぎりかはりけるにや侍　左大弁公任

いつともさだめぬ舟出のかしも

入唐しけるかたちわかれつゝもよ

送りける　寂照法師

その後とものしける　読人しらず

あまのかはせをわたるときけるかへる

織女とのし仙のいかなるね侍

のの母乃もとへみなれのかけ

よみ人しらず

いのりつゝ今ともあふやをしみん

いまし雲井ともしぬる別哉

後拾遺和歌抄巻第九
羇旅
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中納言定頼
[illegible]
[illegible]
[illegible]
花山院御製
旅乃空よはのけふりとのほりなは
あまのもしほ火たくかとや見む

熊野へまいりけるに吹あけ
乃濱をみてよめる

増基法師

都にて吹上乃濱を人とはゝ
けふみるはかりいかゝかたらん

海の人[illegible]るかへちりて月をみて
よみ侍りける

少輔

しほ鶴よそにつゝけ思ひし[illegible]
ふるさともなとも月をみるかな
舟よりも[illegible]もかいにとも[illegible]

ことはつくとてよめる

源國行

道のくによりおほ[illegible]のまいる
ものいはれなくてかへるよ
流の[illegible]ゝまのわかるゝみちにて

能因法師

あしの屋のこやのわたりに日はくれぬ
いつちゆくらんこまにまかせて
あつまへまかりけるみちにて

[illegible]法師

歌乃こゝろハまことにあはれを
こゝ乃かしこにまよはせとなり
和泉ありける人まてに侍ける
よろつのふることはにつけてよめる

和泉式部

ことゝへとあまのまにくものゆくやそま
しやこの春をわかれきてさよ
正月ハ近江へまかりけるに鏡
山まてまゐりけるに侍ける

東宣旨婦

鏡山こゆるけふしもはるさめの
かきくもりてやいつくにまかる
七月朔日ころ尾張より上りけるに
夕くれつかた関山越とてしはし車
をとゝめてやすみてよめる

赤染衛門

こえはてハ都もとほくなりぬへし
関乃夕風しはしすゝまん
桜園ニてまかりける號寛
詠乃こゝろをとゝめける

寂蓮法師

河のへやなごりの月のよやさむき
雲井よりこほれるまゝ猶やまよふ

題しらす　　隆信朝臣

とりのねも霧にまよひなる
秋の山ふかきにたちぬるかな

為家卿下之川寺にて月を見侍る

よもすがらまつはいとふ夜なか
ぬれ衣をやまにきえのこる
ことのちもとやまよふらん

殷富門にはへる

しら雲の上よりかゝる足引の山
しら浪のさやかに見えてたえぬらん
東路のはるかにとほきわれはなみ
ぬる一首よりもあらぬ

源重之

あつまのもとよりうつもれし
ねつきしふ人のたれをわすれ
父の伴にまかりて国にまかりて年へて
後下野守になりて侍りける
ふかき山をたちなすこのみ

大江匡衡朝臣

あはのさ海なかにはなれて逢
むかしみし人のまゝにかはらねは
こゝろもの乃かはりぬるにそ侍る

能因法師

おもふ人ありとなけれとふるさとは
しかすかにこそ恋しかりけれ
みちのくにゝまかり下りけるに
白河の関にやとりてよみ侍る
都をは霞とともにたちしかと
秋風そふく白河の関
出羽国にまかりてきさかた
といふ所にてよめる
世中はかくてもへけりきさかたの
あまのとまやをわかやとにして
流されてまかりける人のもとへ
乃国にまかり侍る

大中臣能宣朝臣

春乃うちはちるともなくてかすみ
身にしみてもこそはつねに
なからへてやとまつらむ

筑紫にて海のおもてをみやりけるにさえや
かもめとりくそらにあまる

大貳三位

風吹はもしほのけふりうちなひき
雲もおもかけのこりけり

すまのひまに（?）まきれ播磨路よ
おもひまてなしと播磨の月を
清かりて

藤原清輔

月は播磨のあかしとそらに（?）
ゆきとふかのうへにてまやかなむ

播磨にあかしにまかりてまかりけるに
こゝに海のおもてに月のあかくみえけれは
中宮大夫盤所まてまかりける
かなしみ

中納言資綱

光来るあかしの浦やいかならむ
こよひあかしの月もさやけき

在

偏武部

あかもかんあかしの浦の月をみて
あかしの月はいつくよりあかん

常陸よりのほりけるに月をみて

はへるところにてよめる

康資王母

月ハなを雲井なれとも見る人の
あかつきの秋のよにこそあかしつれ

宇佐使にて筑紫へまかりけるに
みちにて海上待月といふこころ
をよみ侍りける

橘為仲朝臣

おほよそに山の端をまつ月影を
こよひは波のうへにまちつる

なかめつる海のかなたに月のあはれはまさるらん
東よみ侍りける

藤原国行

ふるさとを出て雲井のなかにみし
おなしみやこの月は入にけり
筑紫へまかりけるにはりまかたにて
侍りける

西宮左大臣

なかめつるよもあまりなるわかれかな
ひとへにせよ須磨の浦なる
つくしへまかりける侍りける小明石也

いなかりしときよみ侍りける

帥内大臣

楊おもふ山乃やまとりしらぬ秋を
あつしらもゝひのあかわ

出雲乃国よりのぼり侍りける道にて
よみ侍りける

中納言隆家

ちくもよりはうこ乃はのよやとうまをめ
しらそ衣なりにくもまよりかる

伊予国にはさ月十日あまりの程まで
いつほはまゝのあまりかな

式部大輔資業

いさきつゝ毎出うしつるゝみゆか
もの哉ひつゝりあへるを
筑紫にわのちりまけるをはれとや
かくらいふ所もとくとくとみ
侍りける

右大弁通俊

あかし吹とおもさせに毎出て
いやくとくくるとやうくまと
越後にわかちまうつるふもとに秋
らぬかもとしまて月あのまうけれ

橘為仲朝臣

みやこの月をあはれと思ひやる
もろともに山のはいつるさかはわかる
きよみの関思ふにわかのちかすすゝ侍るる
ひとちりそふらんかな

源兼澄

ひとをまちしは秋はいちらく身にしめるらん
過ぬるらしいまは旅寝するらん
かすならぬ身もちりそて
ことし東ゆくてきみ山あらしやまの床
ひらも秋いつのあふさか
待まそこるなれ

拾遺和謌抄巻第十

哀傷

天暦御時皇后宮うせ給ひて後
又の年の秋御前の前栽に
露のおきたるを風の吹なびかしけるを
御覧して御製

秋風になびく草葉の露よりも
きえにし人をなにゝたとへん

東宮ひらきし奥まして事をわすれて
いひ出たる人のもとにつかはしける

さらぬ人もなき秋はつまてさえ
あはれにもおほくもいまつらふ
橘以子女乃侍ける事まかりにけれは
うちなくわかは人のいけるにも

源兼長

世の中にあらましかはと思ふ人
なきかおほくもなりにけるかな

山里はこもりて侍るに人のもとより
とはるゝにみてかへし

和泉式部

立乃ほる烟につけておもふかな

いつまたわれを人のかくみむ

三條院皇后宮かくれ給てのち行末(?)

とりへの東月(?)はなかくおもはれ侍

金吾乳母

ふるさとのくものゝ(?)はれぬをみても

乃ともなきはかなきもくもはなかなり

圓融院御葬送をむらさきのにておさめ奉(?)

御葬送侍けるよもすかへ(?)

月もたえ行ぬ(?)かなしき思ひのまゝ

侍ける

右大将朝光

世の中はいかにをかしきやうもかな(?)

まかりをつくしてみゆる(?)

大納言公任

まつ(?)よりてかゝきうすきたまと

めぐりあふ(?)はかなきこゝろかな(?)

長保二年十二月に皇后宮うせさせ給て

葬送の夜雪の降侍てのちよみて(?)

きえ(?)はれ(?)ゆきのふかきみゆきかな

一條院御製

野へまてそりくひよろかよふ人とも
ゑかゝ(?)花(?)きとはきつゝもやなきん

入道前太政大臣の家に人々まかりて
雪のあしたによみ侍りけるに

法橋忠命

ふる雪につきしも雪のふかき夜の
あはれ(?)やしのかほにしもみえぬ

入道一品宮くれてのち葬送の夜
ゆかりて又の日あの(?)さまのもとにつかはし

小侍従命婦

さそおもふ

さゝかまのかけのまつ(?)のはやまに
たちのほるけふりのすゑをみるにつけて

二月十五日のことなれはやかの宮の
葬送の後さうしのもとにつかはしける

いにしへのたきゝもけふの君かよも
つきぬるそめゝをと見るそかなしき

返し　相模

とりへのはまつのけふりにまかへやものを
よいつのうちにこれなかいしかな

三条院御時皇后宮の右近(?)かくれ

行かる時花人の心のうちにありけるかな
きさらきて法華経の序品をよみ
ことなかりけるまゝにかきやすめつゝ
よめる

周防

うきよをはしゐのとやまにかきこもりて
あはれなのしき嵯峨にてあそびけむ
おもひやるかたのなきにはゆくる人のよそ
つかしかりける

相模

といやとおもひやるよりもなく

いかに思ふかはくるしめのや
むし

大和宣旨

なにはかたとわかれてのちもとさへいつるかや
絶ゆるものとしりけん人のいふらむ世を
後一條院御時のはじめ九月ばかりにせさせ
給て侍従清時弘徽殿の
中宮八月ばかりに行幸しけるにいの宮
ふゆ行くる伊勢大輔がもとにつかはしける

あかそめ出雲

いかにしてかゝるかひのかはらぬに

もたよさへりし梅かえにむめかをさそへ
左兵衛督経成 もろともにわけしかは人の
みなはいまそとのみあかひのかほせん
宮内卿師賢 秋の夜のこのまてゆかり
つゆけかる 小左近
よそにみし袖もかはかすなりにけり
わかれてもおもかけにいまはやらぬ
正三位義忠 あふ人もあはぬとなけきつゝ
きみなるゝよもすから十三日のあかつき
なかそ物思ふとなけく

俊恵法師
ぬしなしとこそやとるらん人はみなすてゝ
宮にあそひきていはねよりしる
右京大夫俊信實 まつもしらぬにやすみわたる
侍るなりとちらぬひのけふまてもたえける
太上小宮
いつのまにをもひつゝるをみしこのこひ
吹かせに宮のいつみ落てちりてもみえけれ
ちりやらてなかく思ふ侍りける人
もちゐつゝしのふれ

よみ人しらず

山里のいそのかみゆきちるはわ
このはいろふかくしのみなん

出羽辨のおやにおくれて侍るを
すみそめつかはしけれはあるとふ
とふらひつかはすとてよみ侍ける

前大納言隆國

思ひやる秋の人のあはれをき
かふまそへきをやまもとも
なし

出羽辨

かなしさのたくひなきかな思ひはへ
おもひしる君かなみたをそへは
三條院隠れさせ給ひけるほと
よそへて流しつゝよみ侍る

中宮内侍

おもひきや人なくふとそ風のん
まとふたらふみかなしはあらは
清原元輔のおとゝもなりけるわ
よろつるを越そくやなさふし元輔
かきとゝめいつもとしそよみ侍る

源順

よとひのよより室のかくかまと閨をと
足海のいくへともくらさこえぬ
橘乃則長みちのくに侍りける比
打揚のまそうつかはしける

橘正通

思ひやるおもひいつこにかよふらむ
わかれにしひとの行(?)すゑもかな
後冷泉院御時いと盛ふとゆゑ熊
まつりのしたに侍りける折に左もつかはし
ねともすそ上東門院のとしせ行くたに
はりけるよしをききて侍

式部命婦

おもひやれつのかはにくらさねど
うへのふかきにありけり
後三条院位をさらせ給ての又の年
毎(?)侍はくれて六月一日より
ちらくし女房(?)行きいたく
乃清(?)事あとおもひいでけるや
はりもしくるゆゑ

周防内侍

五月雨はよるよるめならぬ人の(?)ほとゝぎすは
うたものなりけり事也しるらん
二条太政大臣花ちらぬはなを侍る
ほかちるゝうちにとりそへよみ侍る

中納言定頼母

昔りよく おほれと おもはしむかしきみ(?)
かこちかほなるのきゝ人のおもはなかれ
子をおもひて侍りけるに夢に
かへらむとよみ侍りける

前東宮実宗卿ハ

さよふけての あはこの世の夢ハたのみをきに
とこめぬやうたれもあらしともなく
父のあまりにけり侍りよよ給ふ

藤原相如女

夢みハ(?)とおもふ(?)に人をおもひつ
まつにあはれむかしのきみ(?)を
けふハ雲国右大臣のかゝりしかは
いもうとの文の相如とよみて侍るに
夢なりけるもあらぬ(?)君なるハ

ねやまもあかいとゝもふりつゝこゝろのし
とふらむ神まつのもちつきはわすれ
きえはつくなかるとふらんとのみそん
なる

物いひ侍ける女のなくなりにけるに
つかはしけれは女のおやのもとより
いひける
藤原実方朝臣
あふことはこの世にてはむすはれとも
おもひしりてやのちもわすれし

一条摂政
なきまゝのわすれて侍りけるに

ふとしそてくちなまにわすれ侍
りけれは
藤原義孝
しかはかりちきりしものをわたりかは
かへるほとにはわするへしやは

小式部内侍なくなりて侍けるにむま
こともの侍けるをみてよみ侍り
よめる
和泉式部
とゝめおきてたれをあはれとおもふらん
こはまさるらんこはまさりけり

一條院うせさせ給てのちなてしこの

七月はつかのころ一條院かくれさせおはしま
しまして後なてしこの花のとし行
けれはおほしいつることやありけん
上東門院
みるまゝに露そこほるゝおくれにし
心もしらぬなてしこの花
道信朝臣
もろともに紅葉見んと
契りける人の身まかりに
ての秋よみ侍ける
藤原實方朝臣
見んといひし人はゝかなく消にしを
ひとりつゆけき秋の花かな
五月のころほひ女にはしめてつかはしける
ほのかにも音にきゝつゝ待わたる
ころ
左近中将
おほ空の五月雨はれてゆふ月も
雪わかれいくよりかへしつる物
田舎に侍りけるに京に侍る
おやのもとへいひつかはしける
ほとゝきす山をまたきにまたいはぬ

よみ侍りける　大江嘉言

なかめしよりいまはいつくへわすれなん
まつへき人もなきわかやとは

敦道親王におくれて侍りける

和泉式部

いまはたゝそよそのことゝ思出て
わするはかりのうきこともかな

おなし心なやみ侍る人のもとへと思ひて
よみ侍りける

権りそ思ふとも人よりさきの
君よそにありし物とおもひしに

七月の頃にもなりて後侍りける
なき人のかくやとかきて君遣
わかれもせむやなみたさきの道

右大将通房身まかりて後
たえ侍りける堀川の家にくものいの
かゝりけるをみてよみ侍りける

土御門右大臣女

別れにし人はくへくもあらなくに
いのちかきりやまつもかなしき

為世やよはひのかきりはけふなれは
あまりにうれしく人なとおもひきこえける
侍ける
大弐高遠
逢ことはゆめのうちにもなきものを
いつかきくともみえぬとしなれは
道経朝臣重なくなりて後のわさし侍けるに
ものおもはてさへいとゝ中にこそ
かれいふへとそ人のいまそいきけれ
源道済朝臣
ありしよりはとしもわかぬ事も

うきしとおもふたえいのちをしらぬかな
少将あへてよにありけむありしくもなし
あさけきさへものおもひつかへ百和合
をちいそにもちにこそいはましかしとの
権中納言の忍のうちわかれ
藤原道子内親王
いつまてのうめのさくらとものしく
といひこそあはれもしりかねむとしも
おもふ人にあまたのあはれかとこそ
なとなかれてはつるまてもいふかへる

人よりもうきくもとおもふ女乃はなれ
かゝりける

伊勢大輔

梅さくらみなちるかたのわかれにはさそはぬ
風はおもふしらずやはらしかるらん

卯月一日おほきさいの宮にまいりて
みな人のもとのこゝろおもひやるに
といひおこせ侍りける返しになりける

康資王母

思ひやれいはしろのなるゝもたちのこるかたの
たもとかはりておもひしれなる

赤染衛門にまたおくれ侍りて後五月五
日よみてつかはしける

典侍三位

里はあれぬたびにはいとゞあはれなるを
あやめ草くさのはやしげりゆらん

圓融院法皇うせさせ給ひて又のとし
の御はてのわざにふとの時にや奉るへき
うたよみ侍りける御乳母の藤三
位の局よりくらゆるうたのおはいりて
しのびのみ御よそひてしのびをこなひし

いまこそ行かまし

一條院御製

足ひきの山のみえとおもひつゝかすみ
はるかにやしつ(?)の梢(?)葉のゆき
ほのかに見えし川の行衛はなし
よしなわかれ(?)ゆくてものとしや秋もこえ
あはれなるかなの...ておもひて...る数
とゝ人のおもひやりかねつる

廣(?)家(?)女房

ちきりおもふ...こころ...秋萩のも

なかつきのこころに秋きりは
曙(?)順よそへ行きのとしそのねそ
しほりゆかまし

伊勢大輔

別ゆくつきの月にゝくさまさへ
いきもやらぬ人をとめし
音(?)にもきゝ行るかゝりてそ文も
とふらへのわかれてそつかなる
ほとゝきす

紀時文

人をなへたつかれぬる人を秋のし

よハゝとしのなかまて有ける
在し

清原元輔

別るをいかにとてなかるのハ
おもひいてらるゝ人のなかも
後一条院御時皇后宮にてまかせた
まふ夜めいそのとも〻まてこ〻ろもあ
里をもとめつゝ秋の〻乃なかわ
咲つゝいとふともつゝやともふとい
いり給〻をと侍けるに侍る

江侍従

ゑ面りハのさしき〻しらなきせてハ
きつふをいそくと思いとまりわ
ちゝの服ぬき侍けるによめる

平棟仲

おもひいるゝのこりも思ふにあらめ
なほふかくもつきぬなみた

平教成

うきこと絶える乃みたハなかりしとも
おもへとも乃つらさにてなかめつゝ
かくやさし侍けるはかなさ

藤原定頼卿女

ことならしつるみよのなかにあるなも
ゆくへはかりにしりをしてむなくなる
十月ついたちころのくれつかたに
みくるまに一條院にまかりて車より
いてゝ見侍りしにけふはいかのしはさなと
侍りしなれはさこそたのまれ

赤染衛門

清水にまうて侍りし清士のたちきこえ侍るとて
蟬といふ事をきゝてよめる

菩提樹院は一条院の御葬送の
のちにたてさせ給へる寺なりと思ひ
出てよみ侍りける

出羽弁

伊勢のいつきにてまかりしとき雲井まて
あかしかた月はかはらすなけかれて
良僧正の都をまかりて石山にまうて
侍りけるにあはれをしるきみやこの
あはれ侍るをとはせたまはゝあはれに
なりてかきとせよつゐにわかれはなきに

といつみハしらす覧

赤染衛門

猶さりあれし松く事ハなかりけり遣
めつらしき宮ハいまこそ人にわ
難波よりさきの小一条院の
よろひ給へるをみすへしと花をまいらせて
まわてたつしもと思ひ侍てよめる

源信宗朝臣

いはへつる難波の事もかはりぬる覧
ふくるまのうきおもひ旅ハ人のわすれき

かれにける人の侍りけるおもとをこえにける
後信宗朝臣乃許よりつかはしける

伊勢大輔

おもひきやなかれにふかき乃つら浦をしらす
あしのうちにハまたそなかりき
数ならぬまつわりなる人を思ひつゝ出て
とふ覧

源重之

なにとなくつけてハきぬわかれ
しのふしとけいはまするもちかつわ
きつゝ見る涙はしものそをかはかす川

帰るほとにハわするへしやと
けるハ義孝少将のいひ給ける小
なくなりたまふともしはしまて経よ
みはてんといひをきけるを女房はわすれ
てのちいともあさましのわさにて後
わすれとくしてさうはいふの
夜母の夢にみえてかなしふかなわ
さてはちくさの花そちりまかふらん
あはれなるの袖ぬらすらん
この歌は義孝少将のよみ給ひ侍る

十月はかりに賀縁法師の夢に
小将ここちよけにて笙をふくと
見侍りけれハくちをならすはかり也
まかりけるに母のかくはかり
恋つるをも他地よりきてハいふと
いひ侍りけれハよろつをのゝきて
しくれとハ千くさの花そちりまかふ
あきかれし衣の袖もかわくらん
わか袖しほるゝわかれの歌
この歌見まのわてはかなく侍る

乃悔いもとの夢よかれは寝ぬ者
のふみとてやみにけり
あるこそとこふ人にとて出ることと
おはせけれはいとよろこひけり
武人の云ことの歌は思ふ女をとこに
こみなもわたりけるおとこの心ある
の夢はまことなりきこの女はとしせよと
こゑなかりし侍りけれは
むかしをかしのもとへ人眠のもとへやるとて
よみ侍りける

よみ人しらす

あくしも男はいつはりの夢人の
まろのつまこといふいかり
女いふ人をなすれとなさけをかけは
侍りけれ
さもなきまゝならぬこといとこのかえ
我なそ桜なしてい
いつまてまつ秋

後拾遺 乾 坤